

大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

郡山城下町

旧奥野家（紺屋跡）発掘調査報告書

1999

大和郡山市教育委員会

郡山城下町

旧奥野家（紺屋跡）発掘調査報告書

大和郡市教育委員会

例　　言

1 本書は、大和郡山市紺屋町19番地、旧奥野邸で実施した発掘調査の報告書である。

2 調査は、旧奥野邸の整備事業を契機として実施した。

3 調査期間、調査面積は下記の通りである。

調査期間

平成10年5月20日～7月10日

調査面積

49.84m² (延べ約150m²)

4 調査は、以下の組織で実施した。

現地調査

調査員：山川均（大和郡市教育委員会　社会教育課）

補助員：佐藤亜聖（奈良大学大学院）、高見陽子、東原真希子、渡邊信洋（以上奈良大学）、武田浩子

作業員：堀川正治、金浜昭八、川合康弘、喜多美寿子、杉岡雪子

事　務

大和郡山市経済環境部　商工観光課

5 本書は、以下の分担で作成した。

製図・拓本・トレース

高見、東原、武田、山川

執　筆

IV章の一部を武田、他は山川

編集・写真撮影

山川

レイアウト

武田、山川

6 以下の方々に貴重なご教示・ご指導をいただいた。（順不同敬称略）

浦西勉、横山浩子（以上奈良県立民俗博物館）、奥野文義。

本文目次

I 調査の契機および経過	1
II 調査地の環境と調査区の設定	1
III 遺構	
1 第1トレンチ	
(1) 層序	5
(2) 第3・第4遺構面	5
2 第2トレンチ	
(1) 層序	9
(2) 藍甕-01・02の調査	9
(3) 第1遺構面	11
(4) 第2遺構面	12
(5) 第3遺構面	14
(6) 第4遺構面	16
IV 遺物	
1 SX-01出土遺物	17
2 SX-04出土遺物	33
3 SX-03出土遺物	39
4 SK-02出土遺物	39
5 SX-02出土遺物	40
6 藍甕-01・02	44
7 その他の遺構出土遺物	44
8 錢貨	45
V まとめ	46
付載 奥野義夫氏聞き取り調査	47

図目次

図1 大和郡山市の位置	1
図3 郡山城および城下町の構造	3
図5 郡山城下町（町屋地区）の構造	4
図7 調査前の状況	5
図9 第1トレンチ土層堆積状況	5
図11 第1トレンチ完掘状況	6
図13 柱列-01柱穴根石検出状況	7
図15 第2トレンチ土層堆積状況	9
図17 藍甕-01・02埋置状況	9
図19 藍甕-01・02平面図および断面図	10
図21 SX-02検出状況	11
図23 SK-02半掘状況	12
図2 調査地位置図	1
図4 奥野家と紺屋町通	3
図6 旧奥野家間取り図およびトレンチ配置図	4
図8 第1トレンチ南壁土層図	5
図10 第1トレンチ第3・第4遺構面平面図	6
図12 第1トレンチ完掘状況	6
図14 第2トレンチ遺構平面図	8
図16 第2トレンチ西壁土層図	9
図18 藍甕-01・02断ち割り状況	9
図20 藍甕の保温装置模式図	10
図22 SX-02平面図	11
図24 SK-02完掘状況	12

図25 SK-02断面図	12	図26 SK-03断面図	12
図27 SK-03半掘状況	13	図28 SK-04土層断面図	13
図29 SD-02および石列平面図	13	図30 石列立面図	13
図31 SD-02断面図	13	図32 SD-02検出状況	14
図33 SD-02完掘状況	14	図34 SX-03平面図および側面図	15
図35 SX-03上部土師皿検出状況	15	図36 SX-03下部丹波焼壺検出状況	15
図37 SX-03下部土師皿検出状況	15	図38 SX-04平面図および断面図	15
図39 SX-04検出状況	16	図40 SX-01出土遺物実測図1	18
図41 SX-01出土遺物実測図2	19	図42 SX-01出土遺物実測図3	20
図43 SX-01出土遺物実測図4	21	図44 SX-01出土遺物実測図5	22
図45 SX-01出土遺物実測図6	23	図46 SX-01出土遺物写真1	23
図47 SX-01出土遺物写真2	24	図48 SX-01出土木製品実測図1	25
図49 SX-01出土木製品実測図2	26	図50 SX-01出土木製品実測図3	27
図51 SX-01出土木製品実測図4	28	図52 SX-01出土木製品実測図5	29
図53 SX-01出土木製品実測図6	30	図54 SX-01出土木製品写真1	30
図55 SX-01出土木製品写真2	31	図56 SX-04出土遺物実測図1	32
図57 SX-04出土遺物実測図2	33	図58 SX-04出土遺物写真	34
図59 SX-03出土遺物実測図	35	図60 SX-03出土遺物写真	35
図61 SK-02出土遺物実測図1	36	図62 SK-02出土遺物実測図2	37
図63 SK-02出土遺物実測図3	38	図64 SK-02出土遺物写真1	39
図65 SK-02出土遺物写真2	40	図66 SX-02レンガ実測図	41
図67 SX-02レンガ写真	42	図68 藍甕-01実測図	42
図69 藍甕-02実測図	43	図70 藍甕-01・02写真	43
図71 その他の遺構出土遺物実測図	44	図72 その他の遺構出土遺物写真	44
図73 銭貨拓影	45	図74 銭貨写真	45
図75 刷毛	47	図76 糊筒	47
図77 洗紙	48	図78 門幕	48
図79 長屋跡	51	図80 裏庭	52
図81 藍甕埋置場所	52	図82 作業台	52
図83 藍甕	53	図84 刷毛	53
図85 紋り棒	53	図86 伸子	53

表 目 次

表1 郡山城および城下町関連年表	2	表2 遺物観察表1	55
表3 遺物観察表2	56	表4 遺物観察表3	57
表5 遺物観察表4	58	表6 木製品観察表	59
表7 銭貨観察表	60		

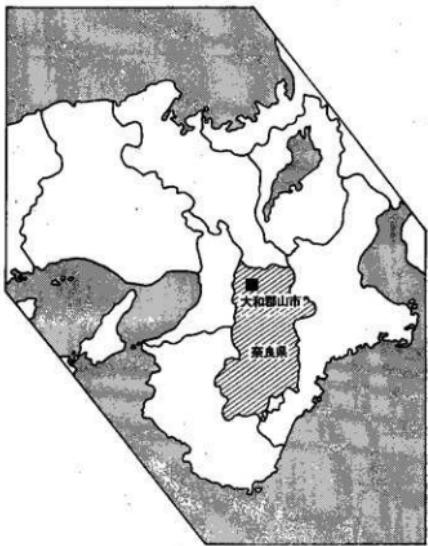


図1 大和郡山市の位置

I 調査の契機および経過

大和郡山市では、郡山城下町において近年まで紺屋を営んでいた奥野家を買収・整備し、藍染めの体験学習施設として整備する計画を立てている。今回の発掘調査はその事業に先立って実施されたものである。

発掘調査は、平成10年（1998）5月20日から同年7月10日まで実施した。調査は後述のように現有建物の存在しない区域に小規模なトレンチを2本配して行ったもので（図6参照）、それらの合計調査面積は約50m²である。ただし、各トレンチで複数の遺構面を確認・調査したので、実際の調査面積はそれに数倍する。なお、調査はすべて人力によって行い、重機は使用していない。

II 調査地の環境と調査区（トレンチ）の設定

郡山城、および城下町では（図3）、中心となる本丸・二ノ丸部分（以下、「城郭中心部分」という）を西ノ京丘陵の最も標高の高い部分に置き、それを取り巻く丘陵裾部分には比較的身分の高い武士が居住した。三ノ丸は城郭中心部分の東で、旧街道（筒井街道。山川1996参照）のラインを一部改変して設けられているが、ここには五軒屋敷が置かれ、家老級の屋敷群などが存在した。その他の武士は城郭中心部分の北側一帯を中心に屋敷を構えていたが、下級武士の居宅はさらに外濠近く、もしくは濠外の城下周縁部分に存在した。城下町の町屋地区は、城郭中心部分の東～東南にかけて広がり、寺院



図2 調査地位置図（1/25,000地形図「大和郡山」に加筆）

西暦(年号)	城郭の変遷	城下町の変遷
1580 (天正8)	<ul style="list-style-type: none"> ・「鍋島合戦三千石、只今の大丸かき上げにて住居、二ノ丸に家老を初め、家来百姓入交りて居候よし中伝候」(郡山城旧記) ・鍋井順慶がこの地に目をつけ興張り。 ・信長の「国中取城令」により、大和國では郡山城のみ残る。 ・順慶、郡山城に入る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・堀城となり多聞山城の大石を鍋井に運ぶ。 ・郡山天守を急造。 ・鍋井城下の商家郡山に移転。本町・塙町・魚町の成立。
1585 (天正13)	<ul style="list-style-type: none"> ・豊臣秀長が入部（100万石）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本格的な築城の開始。 ・紀州根来寺の門を城門として利用。 ・春日社の水谷川から大石を切り出し、郡山に運ぶ。石が不足し、多くの礎石、石地蔵、五輪石などが持ち込まれる。 ・本丸昆沙門郭・法印郭・櫻郭・二ノ丸・キリン郭・玄武郭の完成。 ・京良での商売を禁じ、郡山城下繁榮策をはかる。 ・南本制度はじめます。箱本13町の成立（本町・魚塙町・押町・柳町・今井町・綿町・關町・奈良町・兼綿町・茶町・木材町・綿屋町・豆麻町）。 ・多武峰大勝冠の郡山遷座。
1595 (文禄4)	<ul style="list-style-type: none"> ・増田長盛入部（20万石）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外堀や懸壁（外堀）の普請にかかる。 ・外堀の完成→郡山城の規模確定。（總延長50丁13間、内側土居、外側堀） ・城下町の発達。家中も城下に集中し始め、侍屋敷も多くなる。
1600 (慶長5)	<ul style="list-style-type: none"> ・増田長盛除封。 ・大久保長安郡山在番、奈良代官となる。 ・大坂夏の陣で、郡山城下焼き払われる。 	
1615 (慶長20)	<ul style="list-style-type: none"> ・水野勝成入部（6万石）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣・堀の修築（幕府直轄）。 ・二ノ丸台所構築・本丸御殿・三ノ丸・東中屋敷の修復。 ・五軒屋敷築う。 ・侍屋敷・広島町ができる。 ・兼綿町南端の幡成町（遊郭）を洞泉寺に移す。
1619 (元和5)	<ul style="list-style-type: none"> ・松平忠明入部（12万石）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・二ノ丸屋形の造営。 ・鉄御門・一虎丸御門・桜御門・西大手門の城門を伏見城より移す。 ・近世郡山城の威容が整う。 ・武士屋敷の増築（2757人の家臣団）。 ・奈良口町東・新九条町・高田町・片原町・観音寺町・柳6丁目ができる。「掛け作」と称する町屋もできる。 ・城下の家数は4700軒、人口20000人（家中は除く）を数え、近世城下町最盛期を迎える。
1639 (寛永16)	<ul style="list-style-type: none"> ・本多政勝入部（19万石）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・將軍上洛時建設の本丸屋形の取り壊し。 ・武士屋敷の増築（2757人の家臣団）。 ・奈良口町東・新九条町・高田町・片原町・観音寺町・柳6丁目ができる。「掛け作」と称する町屋もできる。 ・城下の家数は4700軒、人口20000人（家中は除く）を数え、近世城下町最盛期を迎える。
1679 (延宝7)	<ul style="list-style-type: none"> ・松平信之入部（8万石） 	<ul style="list-style-type: none"> ・本多家時代の新屋91軒ならびに広島町の武家屋敷を取り壊し田畠化。 ・大火の発生により町屋1670軒焼失。 ・侍屋敷を広島町に建てて増し。 ・火見櫓4カ所に建ててる。 ・城下の復旧に、町屋は瓦葺、塗り込み、土蔵造、並屋造を奨励。 ・2度目の大火発生により、本家490軒、僧家434軒、寺4カ所焼失。 ・家中屋敷の縮小（150~160軒取り壊し）。
1685 (貞享2)	<ul style="list-style-type: none"> ・本多忠平入部（12万石） 	
1724 (享保9)	<ul style="list-style-type: none"> ・柳沢吉星入部（15万石）。 ・金魚の飼育始まる。 ・大河領民5~6000人免乞にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・城郭漸次整う。 ・武家屋敷漸次整う。 ・柳沢氏初期において、主な侍屋敷576軒。 ・内町（外堀の内）箱本13町含め27町、外町（外堀の外、または年貢地）13町。 ・細屋敷組合「覚」なる。 ・光慶寺焼失、幡町火事。 ・農民が柳町（柳異タソボ）造る。 ・新屋町株仲間の成立。 ・郡山大火（幡成町・茶町・野垣内町焼失）。 ・郡山木験動。 ・天明の大氣難。 ・寛政の大風雨により、侍屋敷78軒、町屋107軒、領内民家1234軒損壊。 ・郡山屋敷、横地改め。 ・安政の大大地震（倒壊150軒、半壊400軒）。

表1 郡山城および城下町関連年表

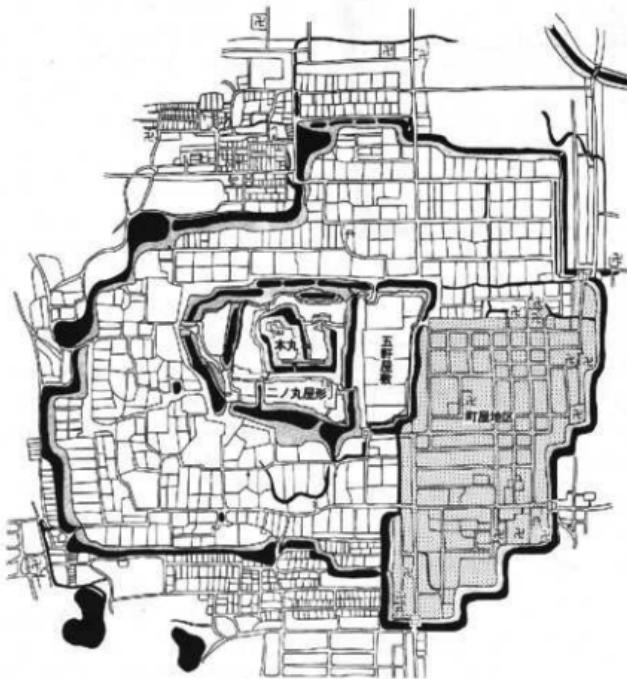


図3 郡山城および城下町の構造（徳川文庫蔵「安政年間和州郡山藩家中図」をトースト化）
※安政年間＝1854～1860



図4 奥野家と紺屋町通（北東より。1993年撮影）



図5 郡山城下町(町屋地区)の構造(約1/8,000)
(大和郡山市教育委員会蔵「生駒郡郡山町全図」
[大正6年]をトレース図化)

群はその東南隅に集中する。こうした城下町の原型は豊臣段階(1585~1595、表1参照)にかけて形成され、後の増田段階(1595~1600)でさらに発達したとされている(浅野1966)。

今回の調査地(紺屋町)は、町屋地区の中心部より南の一角を占める部分である(図5)。郡山城下町においては、他の主要な城下町と同様、城下町繁栄策に基づいて業種別に職人の集住が図られているが、旧奥野家は通称「紺屋町通」と呼ばれる通りに面しており(町名は「紺屋町」)、この道路沿いには近世~近代にかけて紺屋が集中していた(付載参照)。

従前においても郡山城下町(町屋地区)での発掘調査は何回か行われているが、まとまった形で成果が提示されたのは、今回の調査区の南東に接する「新紺屋町」における発掘調査のみである(山川1998)。これは近年における全国的な近世都市の発掘データ開示量に比較した場合、またとりわけ大阪近郊の大型城下町の情報量としてはきわめて貧弱といわざるを得ない。したがって今回の調査はそうした情報不足を補う上でまたとない機会であり、また伝統的な職能を近年まで保持していた現有家屋(敷地)の地下調査という好条件に恵まれていた。

ただし今回の事業は現有家屋の解体を伴うものではないので、発掘調査は図6に示すように裏庭の部分に限って行った。なお、参考までに記しておくと、建築学上の所見に基づく奥野家主屋(「クド」や「紺ツボ置場」のある図示右側部分5間余り)の建築年代は明和年間(1764~72)頃とされ、後に図示左側部分が幕末~近代にかけて増築されたものとされている。また、家伝によれば明和3年(1766)に死亡した当主がこの家を建てたとされており、上述の建築学的所見とほぼ一致している(浅野1966)。

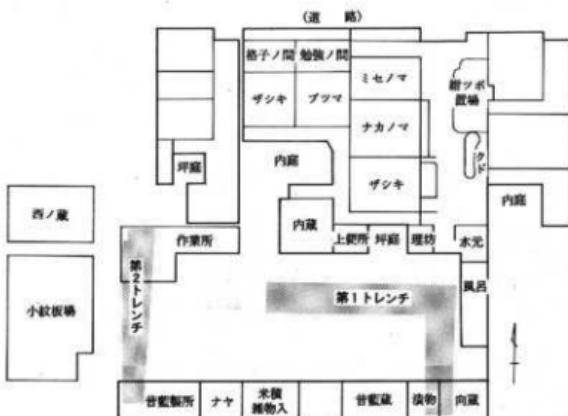


図6 旧奥野家間取り図およびトレンチ配置図(S:1/150)
(大正期家系伝による。原図は能構造計画研究所作成)

III 遺構

以下、先述した2本のトレンチにおいて検出した主な遺構について述べる。



図7 検査前の状況



図9 第1トレンチ土層堆積状況

1 第1トレンチ（図10）

幅2m弱の鉤の手状に屈曲したトレンチで、東西・南北の延長方向はそれぞれ11.5mおよび8mを測る。調査面積は約32m²であるが、今回以下に報告する第3・第4遺構面以外に上層で計2面の遺構面を確認したので、実際の延べ調査面積は90m²程度である。掘削深度は最終的に約1mであった。

(1) 層序（図8）

当該トレンチでは、大別して4時期の堆積層を確認した。これらはいずれも人為的な盛土であり、それぞれの層境が遺構面として確認できた。第1層は表土層で、土壤化した黒色の脆い土である。第2層は暗褐色の粘性土で、幕末～明治期の遺物を含む。第3層は灰黄色の砂質を帯びた粘性土で、18世紀代の遺物を包含する。第4層は黒褐色を呈する砂質を帯びた粘性土で、16世紀末～17世紀前葉頃の遺物を包含する。

(2) 第3・第4遺構面

当該トレンチにおいては、第1・第2遺構面で小規模な礎石や溝状遺構が確認されたが、それがあまり顯著な遺構ではなかった。ここでは第3・第4遺構面において検出された遺構について述べる。なお、調査中は第3遺構面を認識できず、地山面（第4遺構面）まで掘り下げてしまったため、2時期の

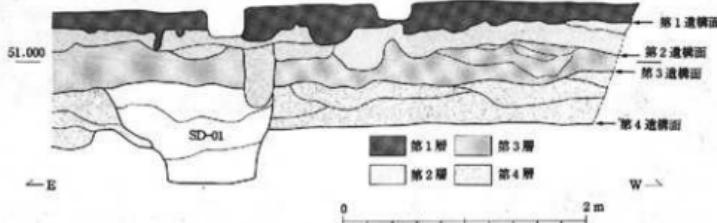


図8 第1トレンチ南壁土層図 (S:1/40)

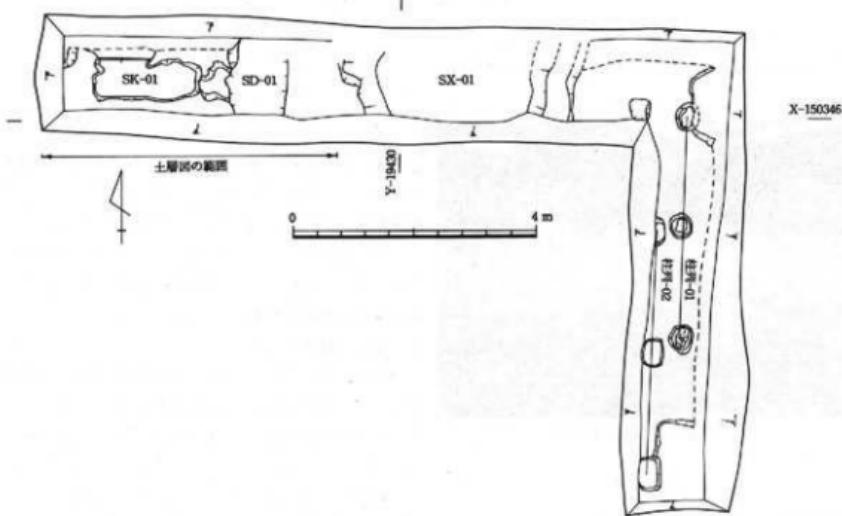


図10 第1トレンチ、第3・第4造構面平面図 (S:1/80)
(SD-01、SX-01=第3造構面 SK-01、柱列-01-02=第4造構面)



図11 第1トレンチ完掘状況（東より）



図12 第1トレンチ完掘状況（北より）

遺構が同一面上で調査される結果となった。図10中、第3遺構面に属する遺構はSD-01、SX-01の2基で、他の遺構（SK-01、柱列-01・02）は地山面（第4遺構面）に直接掘り込まれた遺構である。時期は、第3遺構面は17世紀中葉～後葉、第4遺構面は16世紀末～17世紀初頭である。

SD-01 幅約90cmの溝状遺構である。深さは検出面（地山面）より約40cmを測るが、先述のように本遺構は実際は第3遺構面から掘り込まれているので、当該遺構面からの深度は約80cmとなる（図8土層図参照）。また、同図によれば遺構の上面幅も約1.3mを測るものとなる。遺物には図化可能なものは含まれないが、時期的には17世紀中葉～後葉と判断されるので、後述のSX-01とほぼ同時期である。

SX-01 検出された部分の直径（幅）が2.8mに及ぶ、比較的規模の大きい遺構である。掘削は深度約1mまで行ったが、降雨による湛水で壁面の一部が崩壟し、またトレンチ幅自体が細く作業員の安全が確保できなかったため、完掘は断念した。本遺構に関しては、その平面的形状及び堆積土（壁面支保板のため実測図化できなかったが、基本的に暗灰色の泥質粘土である）から考えて、井戸が廃絶後に廃棄土坑（ゴミ穴）として利用されたもの可能性が高い。遺構内からは後述（IV章-1）のように17世紀前葉～中葉にかけての土器・陶磁器類のほか、ハケなどの藍染に関わると見られる道具類が多数出土した。遺構自体の最終埋没年代は17世紀第3四半期と考えられる。なお、出土したハケの中に焼印「奥野」が押されたものが存在しており（図49-W10）、さらに道具類が藍染に関係するものと考えられることなどから、紺屋としての奥野家の成立は家伝（付載参照）の享保年間（1716～36）より約半世紀さかのぼることになる。

SK-01 東西の長さ約1.7m、深さ約10cmを測る、不整長方形（検出部。遺構は北側の調査区外に向けて西で直角に屈曲して延びる）の遺構である。堆積土は暗灰色の砂混粘土1層に限られる。出土遺物には16世紀末～17世紀初頭の土器・陶磁器類があるが、量的には少なく、図化可能な個体も含まれていなかった。

柱列-01 柱穴3基からなる南北方向の柱列で、方向は北で東に約1°振る。柱間は約1.8mを測る。柱穴はいずれも直径40cm程度の掘り方に根石を置く構造である（図13）。時期は、掘り方から出土した土器から見て16世紀末～17世紀初頭と考えられる。なお、後述の柱列-02との時期差（先後関係）を明らかにするデータは得られなかった。

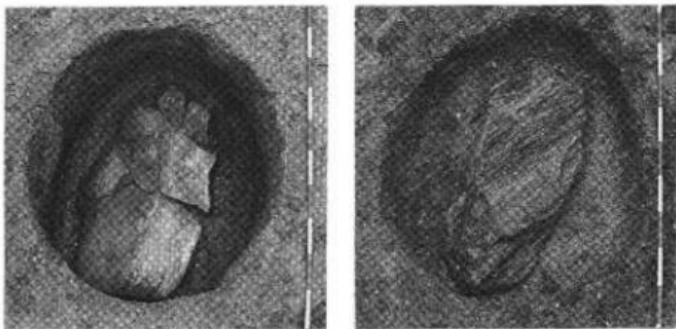


図13 柱列-01 柱穴根石検出状況

柱列-02 柱穴3基からなる南北方向の柱列で、方向は北で東に約2° 20' 振る。柱間は約2mを測り、柱穴は長辺45cm、短辺35cm程度の不整形である。なお、掘り方内には柱列-01のように根石は置かれていません。時期は、出土遺物より16世紀末～17世紀初頭と考えられる。

2 第2トレンチ(図14)

幅2m弱、長さ約10.6mを測る、南北方向のトレンチである。調査面積は約18m²であるが、以下に述べる通り実際は計3面の遺構面を調査したので、その延べ調査面積は約60m²程度である。掘削深度は最終的に約1.4mであった。

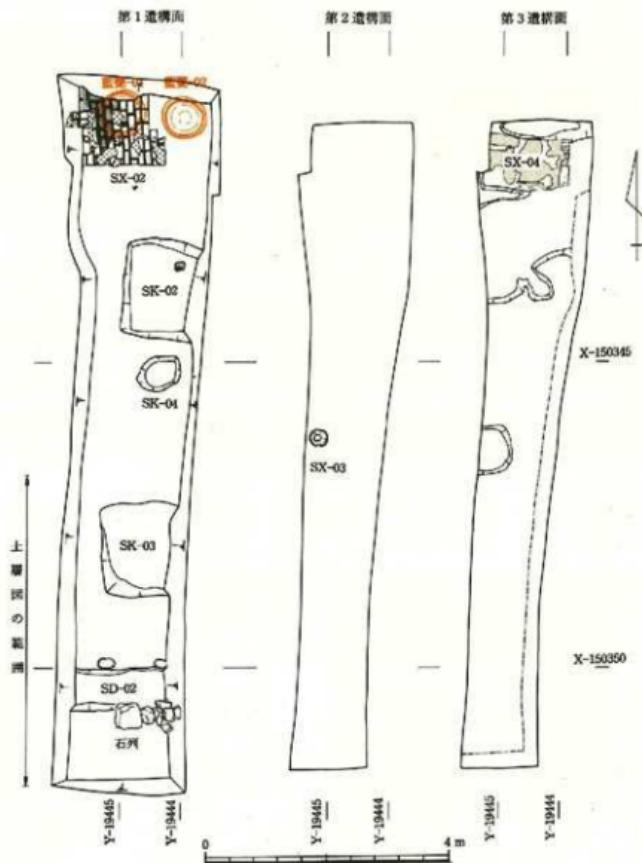


図14 第2トレンチ遺構平面図 (S:1/80)

(1) 層序 (図16)

当該トレンチでは、第1トレンチと同様、大別して4時期の堆積層を確認した。これらはいずれも人為的な盛土であり、それぞれの層境が遺構面として確認できた点も第1トレンチと同じである。第1層は表土層であるが、第1トレンチの対応層に比較すると黄色味が強い。第2層は黄褐色の粘性土で、幕末頃の遺物を多く含む。第3層は暗褐色の粘性土で、主に18世紀代の遺物を包含する。第4層は黒褐色を呈する砂質を帯びた粘性土で、16世紀末～17世紀前葉頃の遺物を包含する。なお、以上の各層位は、呼称が同じものに関しては第1トレンチのものと時期的に一致し、中でも第4層は、ほぼ質感・色調が一致する。このことから、盛土はそれぞれの画期に、調査対象区域内全域において行われたものと推定し得る。なお、遺構面は4面確認されたが、実際の調査では第1遺構面と第2遺構面を同時に調査する形になった。



図15 第2トレンチ土層堆積状況

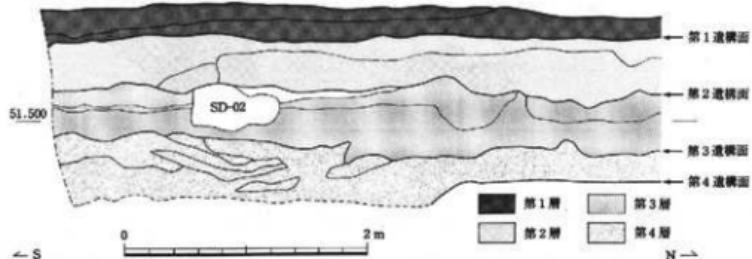


図16 第2トレンチ西壁土層図 (S:1/40)

(2) 藍堺-01・02の調査

トレンチの掘削に先行し、作業場跡において露出していた藍堺の断ち割り・掘り下げ調査を行った。この藍堺は戦前まで使用されていたものらしく、報告者が1993年に当時ご当主であった奥野義夫氏に



図17 藍堺-01(左)・02(右)埋置状況(南より)



図18 藍堺-01(左)・02(右)断ち割り状況(南より)

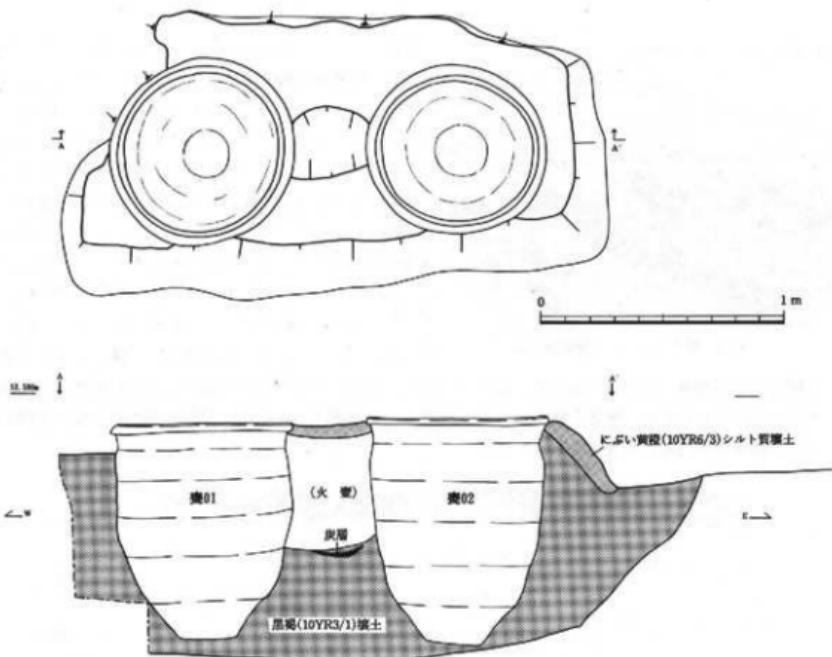


図19 藍窯-01・02平面図および断面図 (S:1/20)

その存在をご教示いただいたものである。藍窯は2基残存しており、口縁部を数cm地表に露出した状態で、その内部には土が半分以上充填した状態であった。両窯の間隔は約30cmを測り、その部分には「火壺」と呼ばれる空間が設けられていた。藍窯の埋設施設は、断面図に示されるように周辺の地面より約30cmほど土を盛り上げた後、その上面を黄橙色の粘土で被覆しているので、一見高さのない竈のように見える。また、窯の周囲に置かれた埋土には多量の瓦片や陶磁器片などのいわゆる「ガラ」が含まれていたが、これは、火壺の部分に炭を直接投入するか、もしくはそこに竈からの煙を導き、その熱を効果的に窯の回りに循環させるための工夫である（図20）。そのため、ここから出土した瓦片にはいずれも煤が付着している。この施設により、冬季において藍の原料となるスクモの凍結

は防がれるので、非常に卓越した熱の利用法といえる。なお、今回の調査では後述のSK-02・03のように、この技術が少なくとも19世紀代にさかのぼるものであることが確認された。また、ここで使われていた窯にはそれぞれ数箇所の漆喰による補修痕跡があり、何回か場所を移動しながら長期間使用してきたものと思われる。



図20 藍窯の保温装置模式図

(3) 第1遺構面

当該遺構面においては、近代以降の遺構が確認された。

SX-02 先述の藍堀-01・02の直下で検出されたレンガ組みの遺構である。第1遺構面を約40cm掘り下げて平坦面を作り、そこにレンガを敷いている。遺構の北と西が調査区外となるため全体の規模は不明だが、西に関してはちょうどトレチの西壁付近で垂直に立ち上がる。本遺構の性格に関しては、レンガの上面に漆喰や煤の付着した部位があることから、竈の基礎部分と推定される。先述のように、スクモの保温に際して使われた竈であろう。なお、時期は一般的にレンガが普及する近代以降で、かつ先述の藍堀



図21 SX-02検出状況（東より）

-01・02（戦前頃まで使用と伝える）に先行するものであることは確定だが、詳細を知るデータは得られなかった。また、レンガ単体の計測値は長辺24~27cm、短辺14cm程度（図66-187・188）を測るものである。

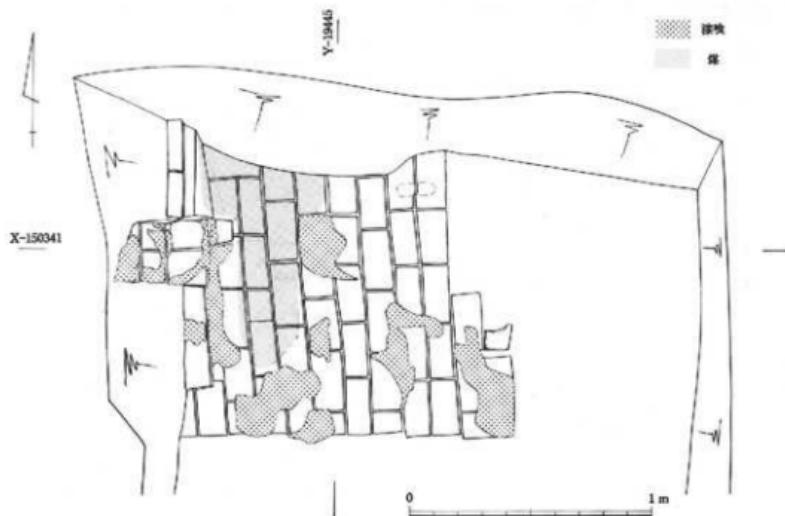


図22 SX-02平面図 (S:1/20)

(4) 第2遺構面

幕末期の遺構面である。瓦片等を充填した土坑や溝が検出された。



図23 SK-02半掘状況（南より）



図24 SK-02完掘状況（北より）

SK-02 南北の長さ約1.5m、深さは検出面から約30cmを測る、長方形？（東側は調査区外のため全体の形状・規模は不明）の土坑である。土坑の内部は図23に示すように瓦片を主体とするいわゆる「ガラ」がびっしりと充填されていた。また、検出部位の北東で角柱が1本立った状態で検出された。本遺構の性格については、先述の藍堺-01・02埋置施設と同様のものの下半部分と考えられる。すなわち、充填されたガラは火壺からの熱を効果的に藍堺に伝えるためのものであろう。このことを示すように、それぞれの瓦片や陶磁器片にはいずれも煤が付着していた。なお、ここでは藍堺は検出されていない。時期は、出土した陶磁器類から考えて幕末期のものと推定される。

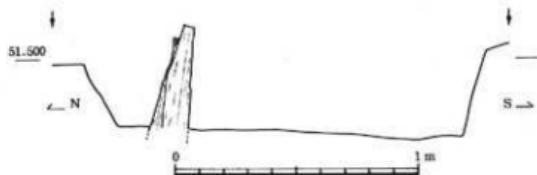


図25 SK-02断面図 (S:1/20)

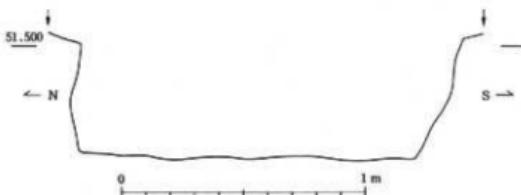


図26 SK-03断面図 (S:1/20)



図27 SK-03半掘状況（西より）

SK-03 南北の長さ約1.5m、深さは検出面から約45cmを測る土坑で、おそらく先述のSK-02とセットになる同時期の遺構と思われる（遺構の東側は未検出）。埋土はほとんどが瓦片を主体とするガラであり、その点もSK-02と一致する。

SK-04 長径70cm、短径60cm、深さ約10cmの不整形の土坑である。堆積土中には瓦や礫を多く含んでいたが、 図化可能な土器・陶磁器類は出土していない。遺構の性格は不明である。

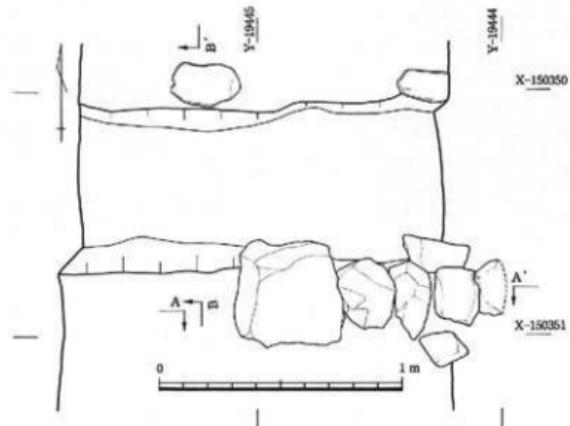


図29 SD-02および石列平面図（S:1/20）

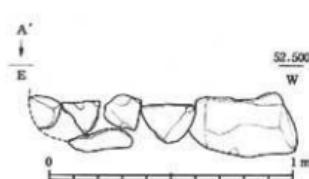


図30 石列立面図（S:1/20）

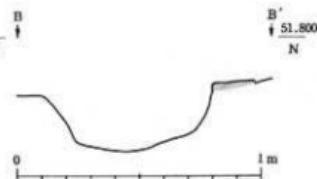


図31 SD-02断面図（S:1/20）

SD-02 トレチの南端部分で瓦片の集積、および石列が認められ、瓦片を除去するとその下から瓦片等をびっしりと充填した溝状の遺構（図32）が検出された。溝の幅は約70cm、深さは約25cmを測る。溝の南には石列があり、北側には溝に接するように礎石状の石（西側のもので長径約40cm、短径約18cmの椭円形）が2基認められた。石相互の間隔は約90cmを測る。時期は、SK-02・03と同時期（幕末期）である。また、瓦片等に煤が付着した状況も他の2例と同じものであることから、本遺構はやはり藍堀の埋置と、それに伴う熱伝導に関わる遺構と解釈し得る。ただし、遺構全体の規模・形状が調査面積の制約のため不明なので、藍堀の埋置施設全体の中でこの遺構がどのような位置を占めるものかは、ここでは明らかにしがたい。また溝南側の石列および北側の礎石状の石と溝状遺構との関係も不明である。今後、藍染に関わる民俗事例の調査等によって類例の抽出に努めて行きたい。



図32 SD-02検出状況（西より）

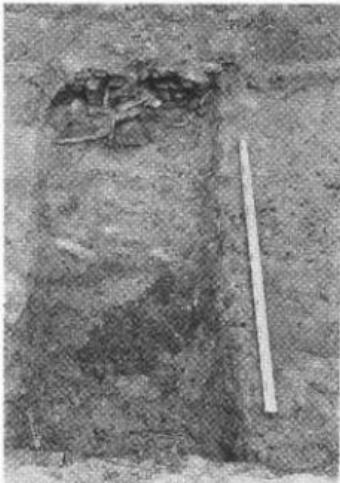


図33 SD-02完掘状況（西より）

(5) 第3遺構面

本遺構面は、当初は明瞭に認識できなかったが、掘り下げの過程で後述のSX-03が検出されたことによって初めて遺構面としての調査を行ったものである。

SX-03 本遺構は、その上部が露頭した状態で初めて遺構と確認されたもので、その後改めて周囲の精査を行ったが、遺構自体の掘り方を検出することはできなかった。また、本遺構は図34に示すように焰烙を二重に重ねた特異な遺構で、ここではそれぞれ「上部」、「下部」と称することにする。まず上部は焰烙を正立の状態で置いており、その内部より土師皿2枚が重ねて伏せた状態で検出された（図35）。なお、土師皿の内部からは刀子と思われる鉄製品が1本出土した。次に「下部」は上部と同じように正立状態の焰烙の中に、土師皿2枚を合わせた状態で置き、さらにその上に丹波焼の壺の体部下半を倒立の状態で重ね置いていた（図36・37）。遺構の性格については、胞衣壺の可能性が強いと思われるものの、二重に焰烙を重ね置くなど、やや特異な面もある。今後、類例の増加を待ちたい。なお遺構の時期に関しては、焰烙や土師皿の形態より17世紀末～18世紀初頭頃と考えられる。

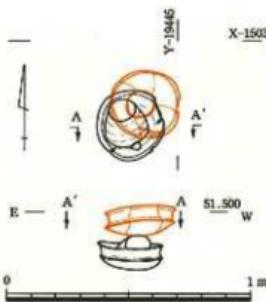


図34 SX-03平面図および側面図 (S:1/20)
(朱色は上部)

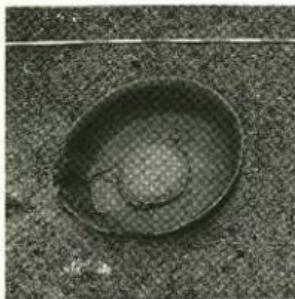


図35 SX-03上部 土師皿検出状況



図36 SX-03下部 丹波焼壺検出状況

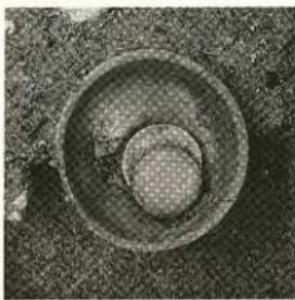


図37 SX-03下部 土師皿検出状況

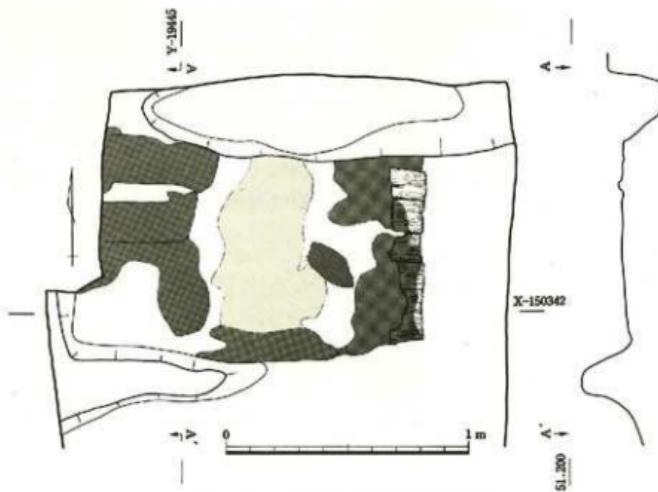


図38 SX-04平面図および断面図 (S:1/20)

(6) 第4遺構面

地山上に展開した遺構面である。トレンチの北端部分（第2遺構面でSX-02を検出した部分の直下）で、不定形の落ち込みと、その一部より板敷き遺構を検出した。



図39 SX-04検出状況（東より）

SX-04（図38） 上面は不定形の落ち込みであり、何らかの施設が存在した可能性が強い。東半において板敷き遺構（一部を残し炭化）が検出された。板敷きは検出部分で長さ約1.3mに及んだが、検出された部分の中央付近において円形状に炭化物が希薄な部分があり（図39）、この部分の直径は約60cmを測る。この遺構の時期に関しては、出土遺物に17世紀前葉～後葉のものが見られることから、17世紀前葉に構築され、同後葉には廃絶したものと理解される。

また、本遺構の性格については、先述の円形の炭化物希薄部分を重視すれば、藍堀埋置の基礎部分（堀の沈下を防ぐ施設）と判断するのが妥当と思われる。本遺構に近い時期の第4層出土の瓦質甕を図71-194に示したが、この甕の内部には白色の付着物が多量に固着しており、近代の藍堀と酷似した状況を示すことから、こうした在地産の瓦質甕が当時藍堀として使用された可能性が高い。ちなみにこの個体の底径は約50cmなので、これと同規模の甕が埋置された場合、先述の直径約60cmの円形の炭化物希薄部分が生じる可能性を指摘し得る（多年の使用に伴い、甕と内容物の重量によって沈下が生じるため）。さらに、本遺構の場合は、近代の藍堀埋置施設や幕末のSK-02・03のように瓦片などのガラを充填する手法は見られない。このことは、こうした熱利用のシステムは17世紀代には確立していなかったことを示すものとして注目される。

以上のように、本トレンチにおいては、近世～近代を通じてこの区域が藍堀や竈を備えた工房として利用されていたことを示す（ただし18世紀代の様相は不明である）。このことは、図6に示した大正期の屋敷図における「作業所」、「昔藍製所」の記載とも整合的といえる。

IV 遺 物

出土遺物の詳細は観察表に記載しているので、以下では特徴的な遺物に焦点を絞って記述を行うことをとしたい。

1 SX-01出土遺物（図40～55）

(1) 土器・陶磁器

SX-01からは、17世紀第3四半期を主体とする遺物群が出土している。ただし、先述のように遺構の掘削はごく限られた範囲を掘り下げたもので、完掘はもとより敵密な層序的発掘も果たしていない。したがって、ここで紹介する遺物群を一括遺物として扱うことに関しては一定の留保が必要である。しかしながら、出土層 자체は井戸の廃棄に伴う比較的短期間の人為的埋積によって形成された可能性が高いものであり（前述）、状況的にはほぼ同時期に廃棄された遺物群と解釈して大過ないものと判断される。

1～13は、肥前磁器染付碗である。いわゆる「初期伊万里」の範疇に収まる様式を有し、時期的には17世紀中葉を前後するものが主体を占める。文様としては一重網目文を描くもの（5～9）が主体を占める。15・16は、肥前青磁碗、17・18は、肥前青磁染付天目碗である。19は肥前白磁碗で、外型による成形が施される。20は、肥前磁器染付小杯の優品である。21～26は、肥前陶器碗で、このうち22はいわゆる「呉器手」と称されるものである。27・28は、肥前陶器皿で、このうち27は見込に胎土目を有する、いわゆる「胎土目唐津」であり、28は見込に砂目を有する、いわゆる「砂目唐津」である。29は、瀬戸・美濃天目碗で、見込に3カ所の目跡を有する。31は、幕筒底の肥前磁器染付瓶。32～34は、肥前磁器染付皿である。この内、32・33は小型の高台で、かつ疊付には離れ砂が付着する。34は優品で、胎土も精良なものが用いられている。35は、肥前青磁皿である。内面にはヘラによる片肉彫で草花を描いており、高台は蛇の目状となっている。本来三足を有したものであろう。

摺鉢には備前焼、丹波焼、信楽焼がそれぞれ見られるが、量的には信楽焼が最も多い。36～38は、備前焼摺鉢である。37は底部が高台状にケズリ出されている。39～44は、丹波焼摺鉢である。各摺目間に一定の間隔を置くもの（39・40）と、それぞれが接するもの（41～44）の2型式が認められる。また43・44の見込摺目は、「+」印あるいは「×」印を付し、その後外周に円を描くものである。なお、40には、重ね焼きの痕跡と思われる焼ムラが認められる。45～53は、信楽焼摺鉢である。見込の摺目は、判明するものでは全て格子状に施されている（45～48）。

土師皿は全て精良な胎土が用いられており、口径が11～12cmのものが大半を占める。54～57・59～62及び73は、灯明皿に使用されていたもので、口縁部數カ所に煤の付着が見られる。また、70・73には、藍染の染料（インディゴ）と思われる物質が付着している。なお、74は外面に人面状の墨描が施され、かつ内面にも墨描が見られる（意匠不明）。

土釜は、いずれも大和I型土釜で、川口宏海編年のIII-3型式に属する（川口1990）。なお、全ての個体の図示（トーン）範囲には使用に伴う煤の付着を見る。時期的には他の共伴資料より考えて、17世紀の第3四半期まで下るものと考えられる。

瓦質土器には甕、壺、香炉がある。82～90は、瓦質甕である。82はヘラ、83・84はクシを施文原体として、それぞれ波状文が施されている。なお、82の内面には白色の付着物がびっしりと付着しており、後述の藍甕-01-02（189・190）の内容付着物と視覚的に酷似することから、本個体に関しては藍甕に

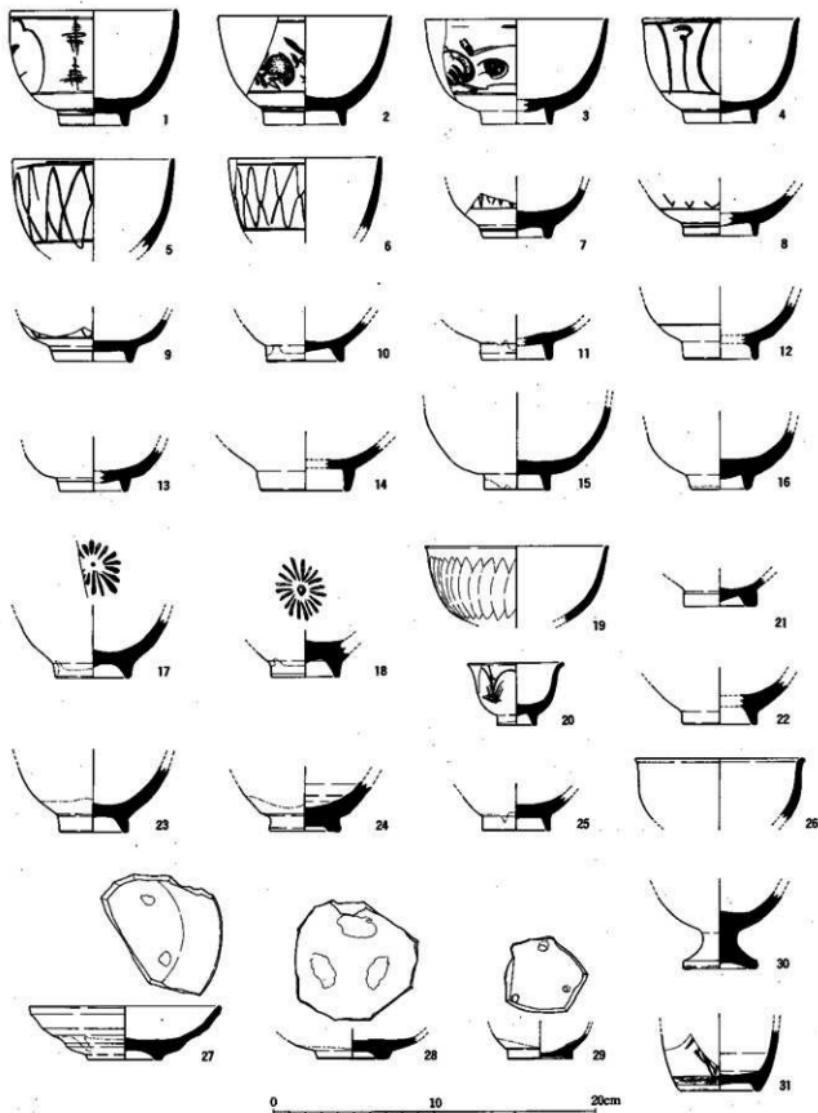


図40 SX-01出土遺物実測図1 (S:1/3)

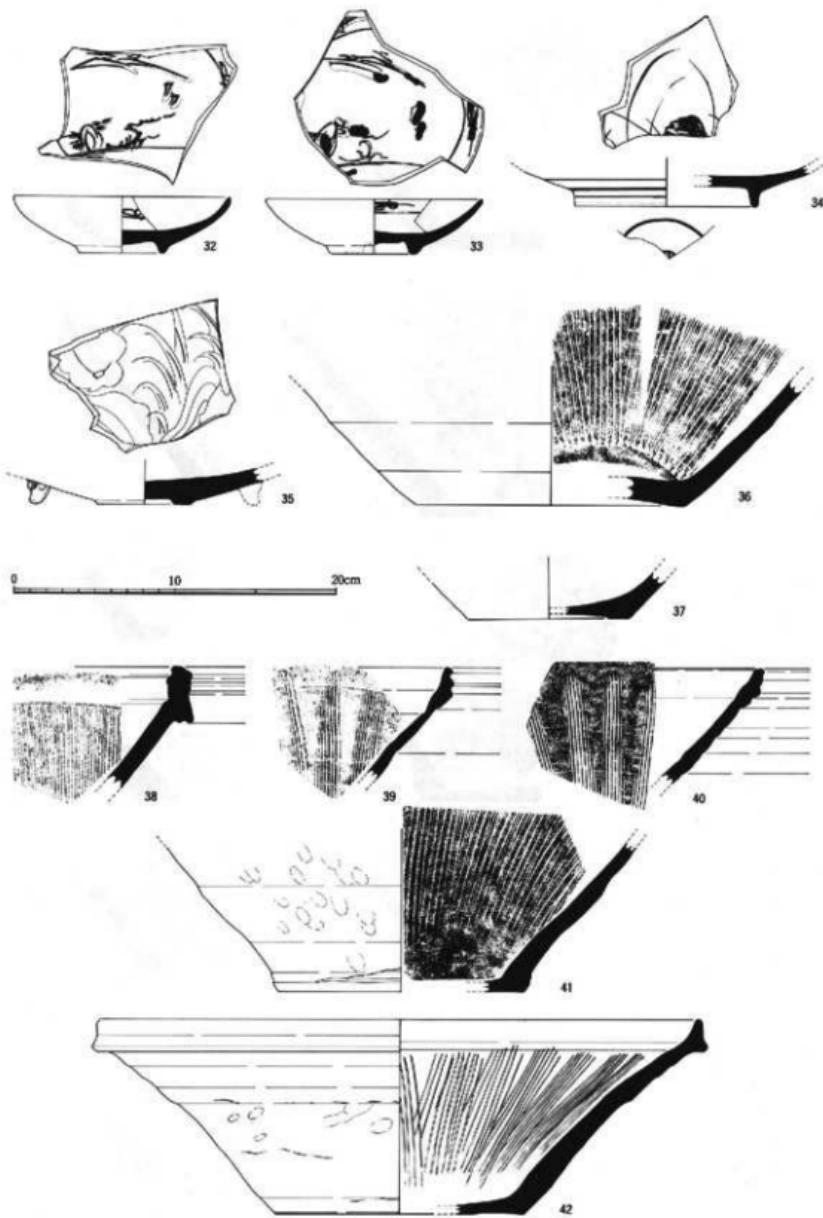


图41 SX-01出土遗物实测图 2 (S:1/3)

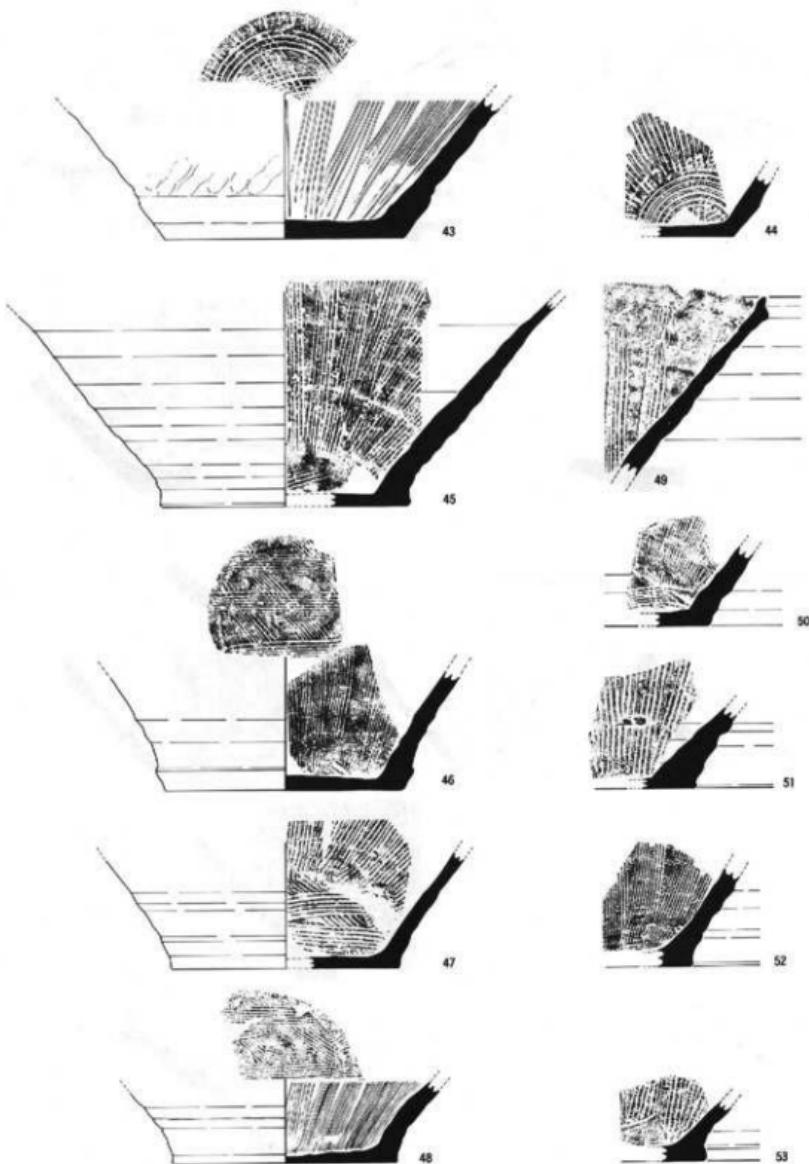


图42 SX-01出土遗物实测图3 (S:1/3)

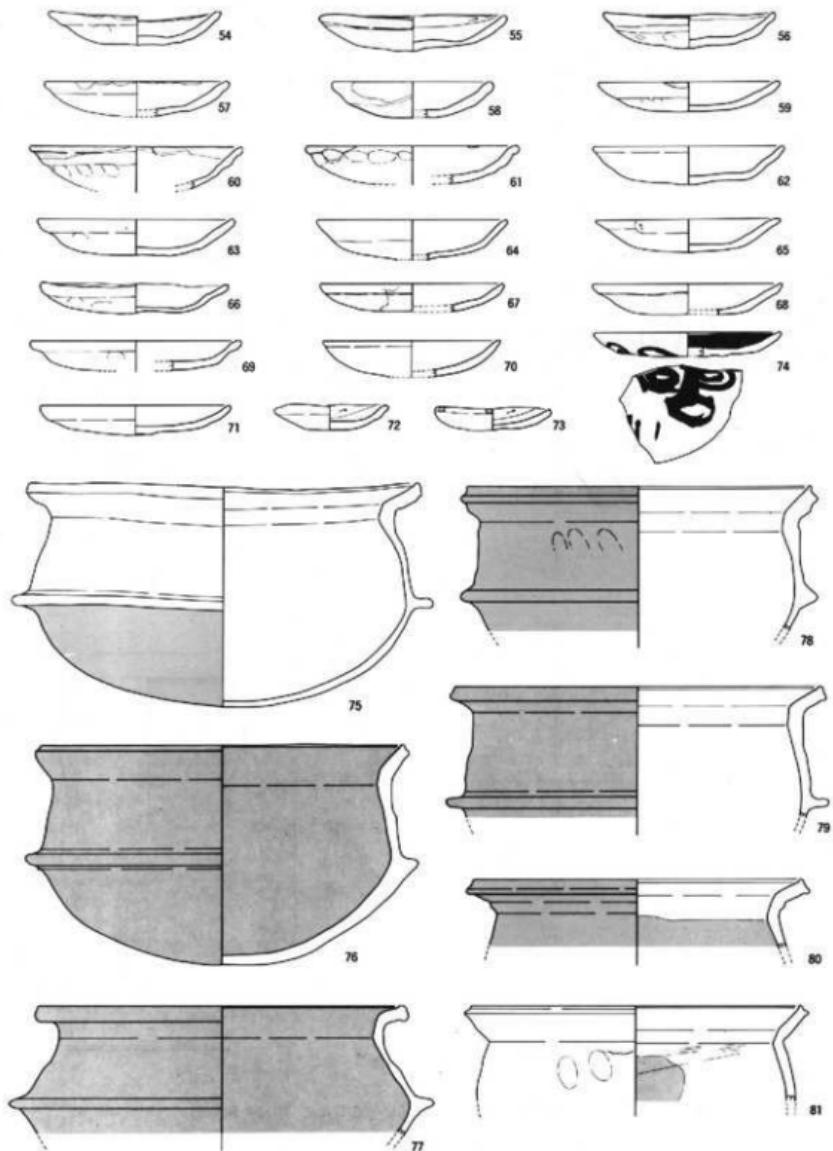


圖43 SX-01出土遺物實測圖 4 (S:1/3)

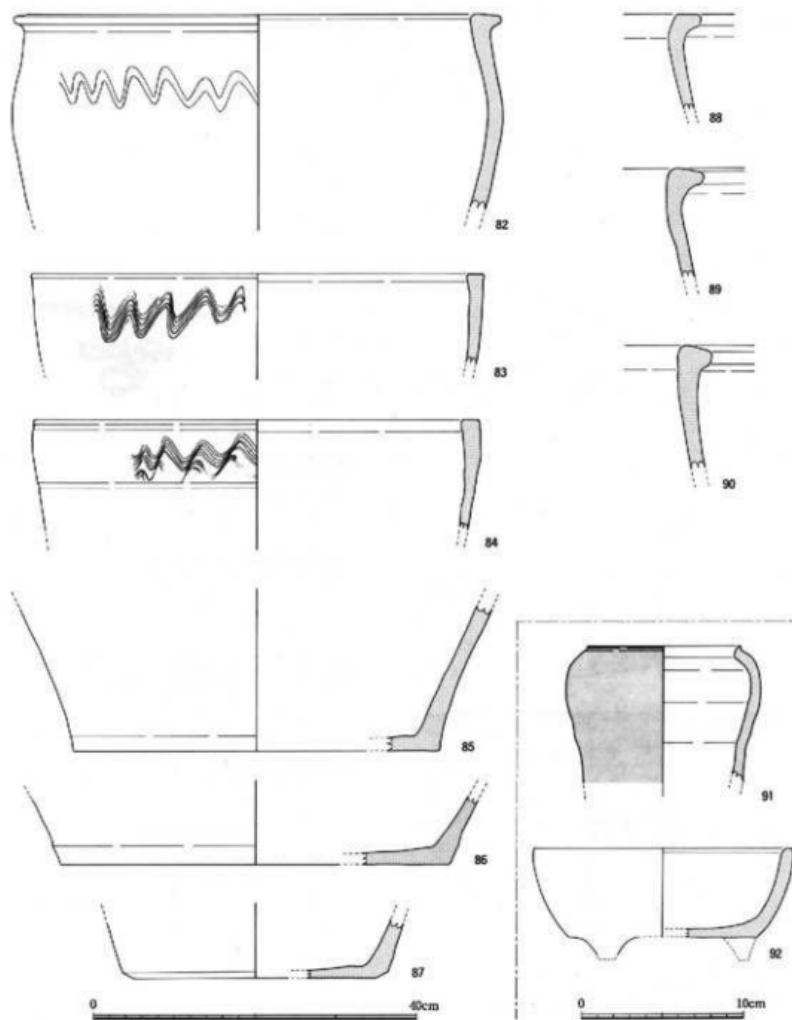


図44 SX-01出土遺物実測図 5 (82~90 S:1/6 91・92 S:1/3)

使用されたものの可能性がある。91は瓦質壺、92は瓦質香炉で、それぞれやや特殊な器形である。

93～105は、土製円盤である。原材料としては、土師質（93）、瓦質（94～102）、陶器摺鉢（103～105）のものがそれ存在する。

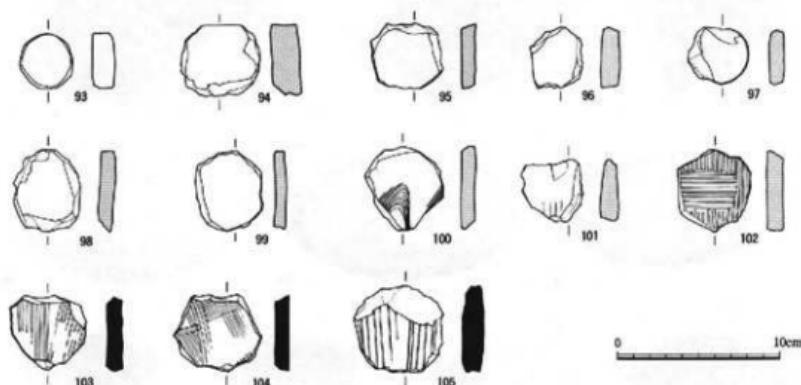


図45 SX-01出土遺物実測図 6 (S:1/3)

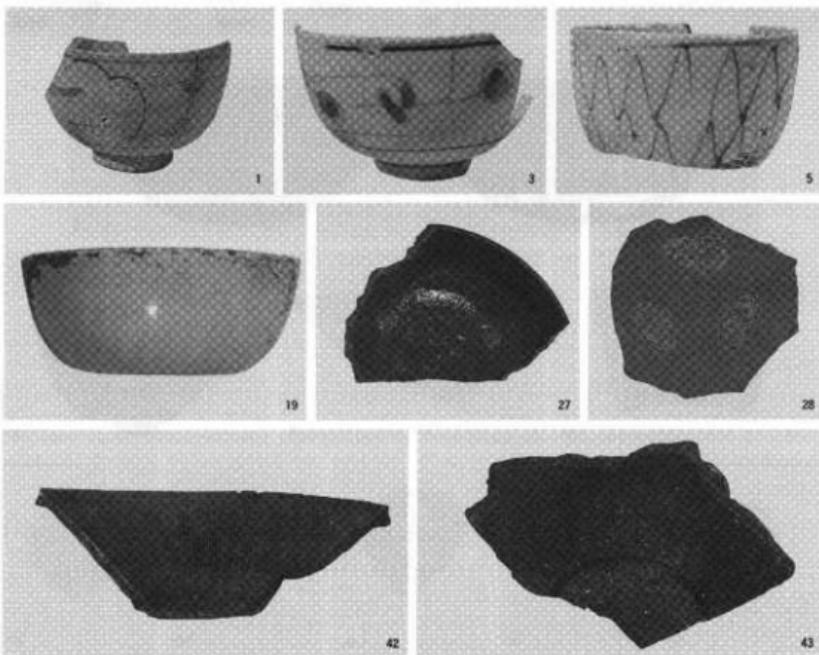


図46 SX-01出土遺物写真 1

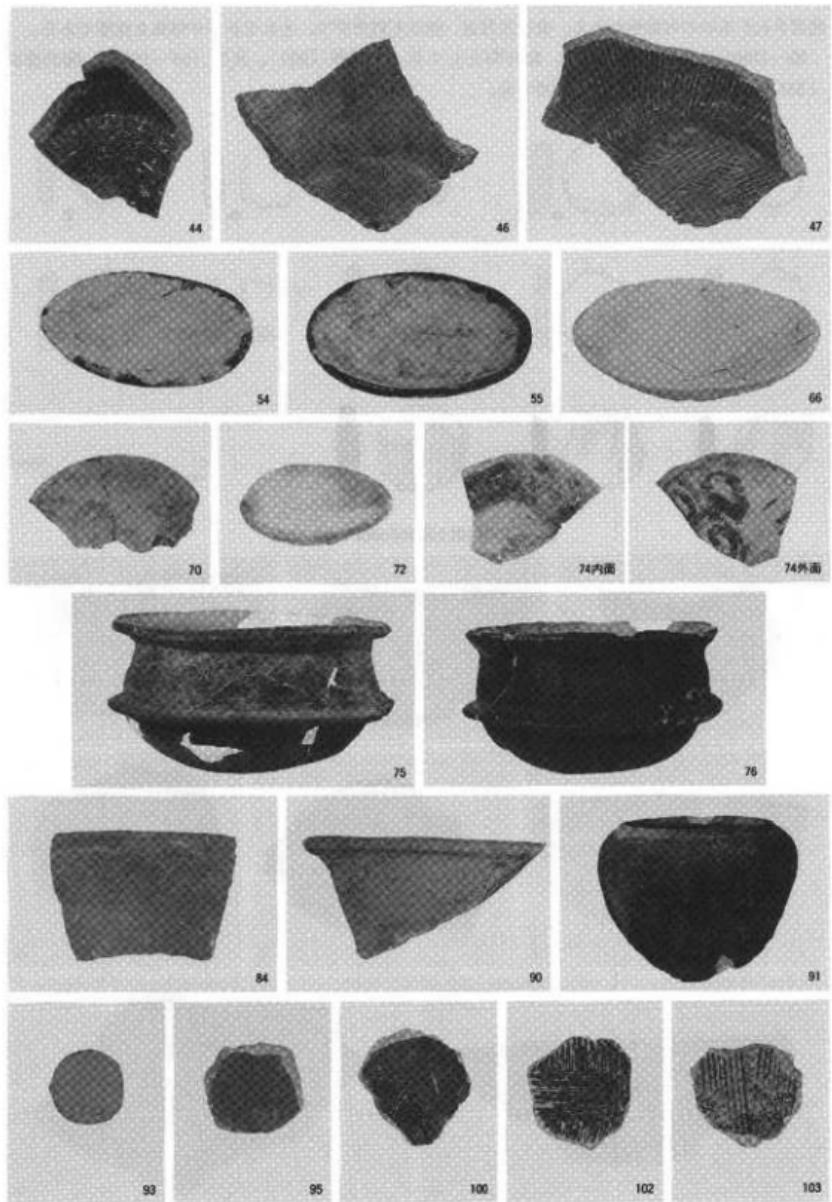


图47 SX-01出土遗物写真2

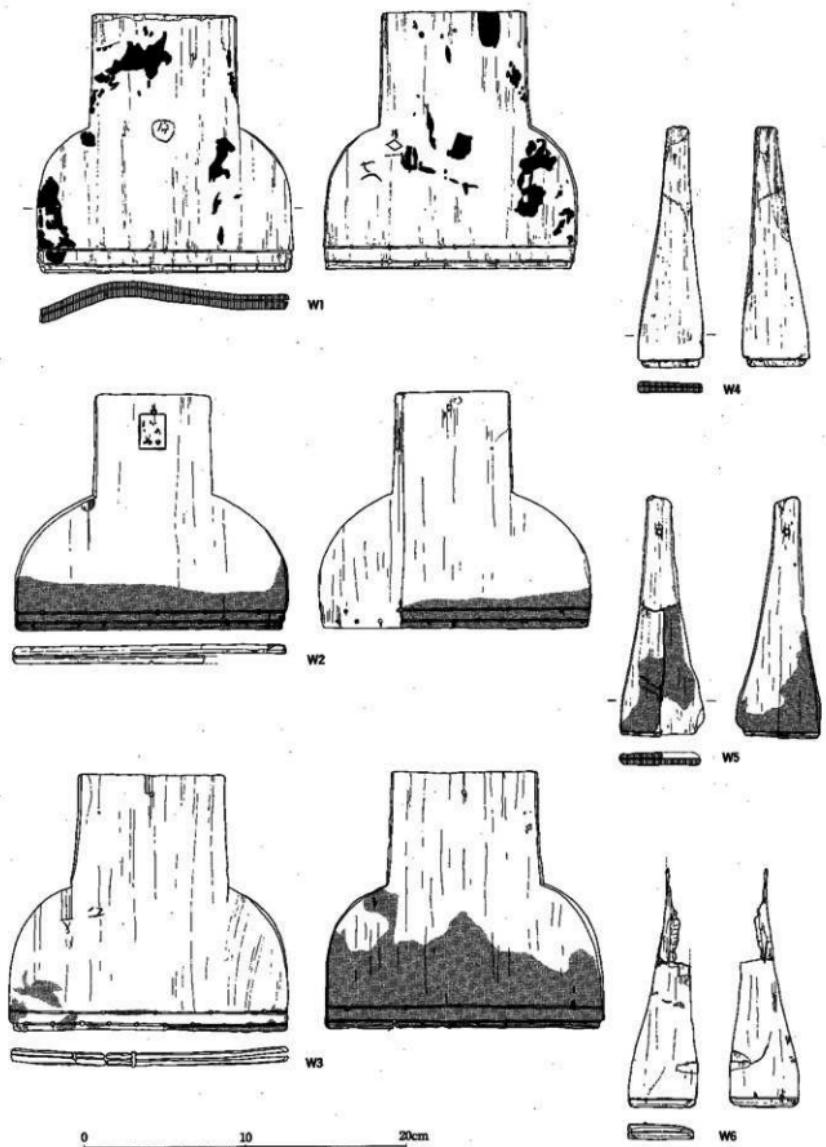


図48 SX-01出土木製品実測図1 (S:1/3)

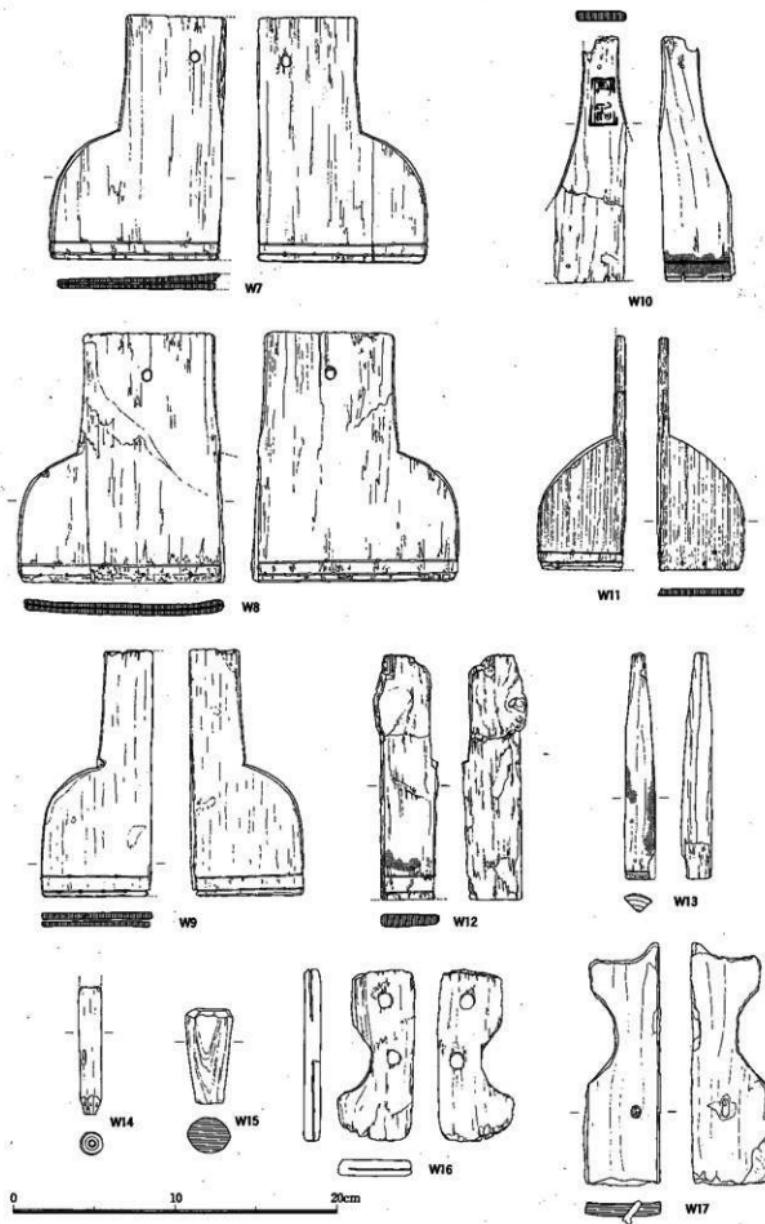


図49 SX-01出土木製品実測図 2 (S:1/3)

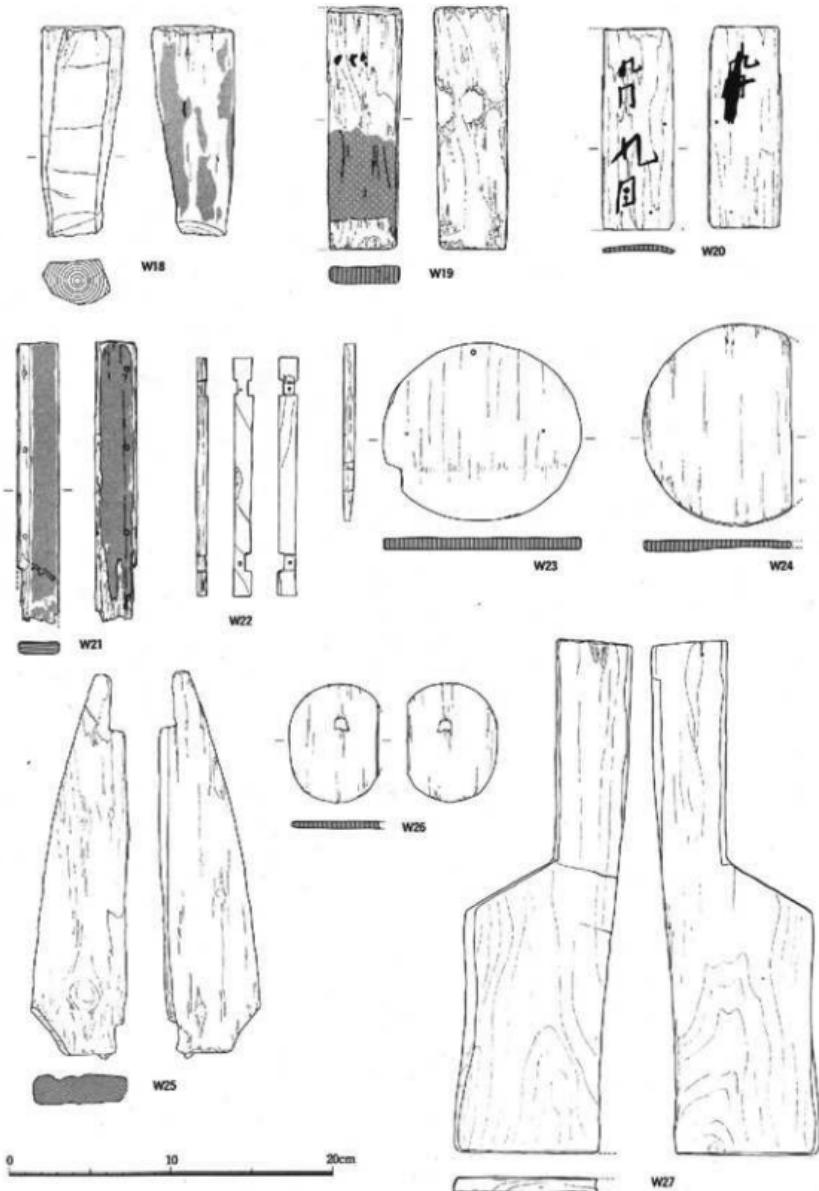


図50 SX-01出土木製品実測図3 (S:1/3)

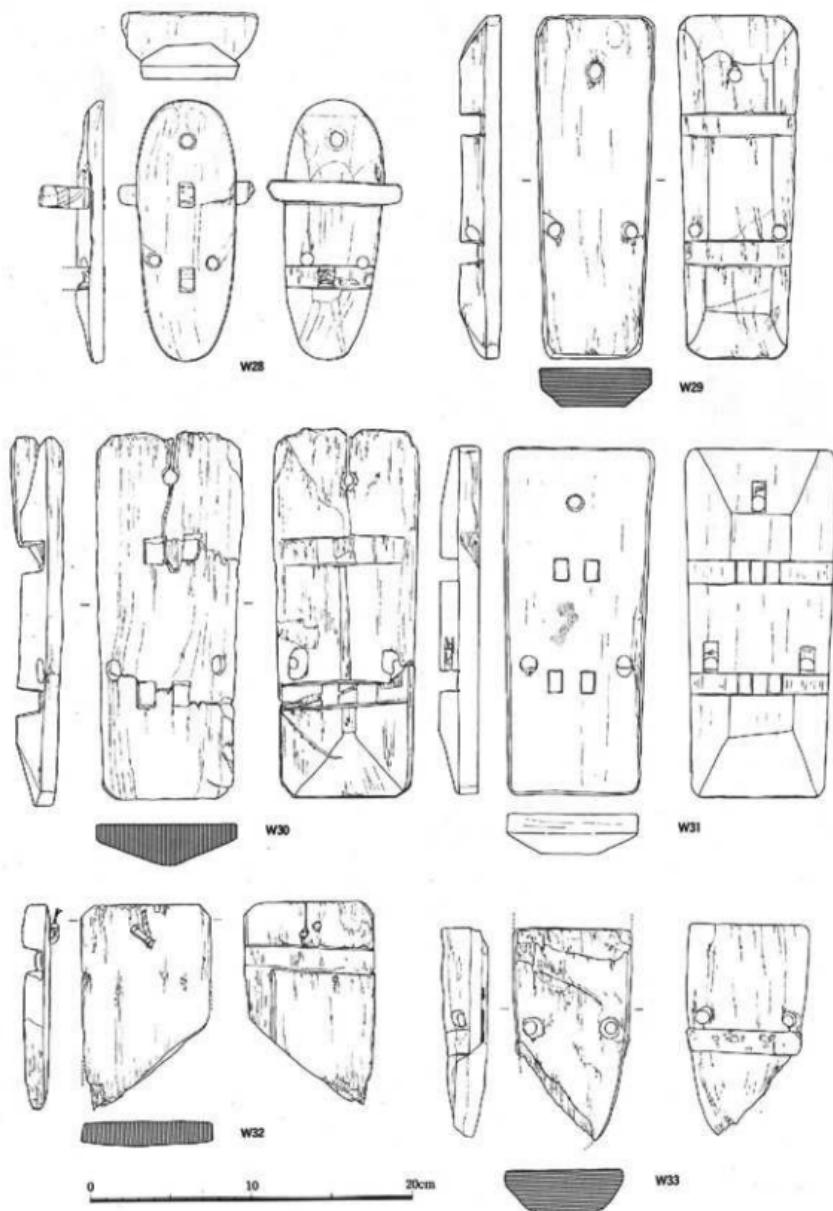


图51 SX-01出土木製品実測図 4 (S:1/3)

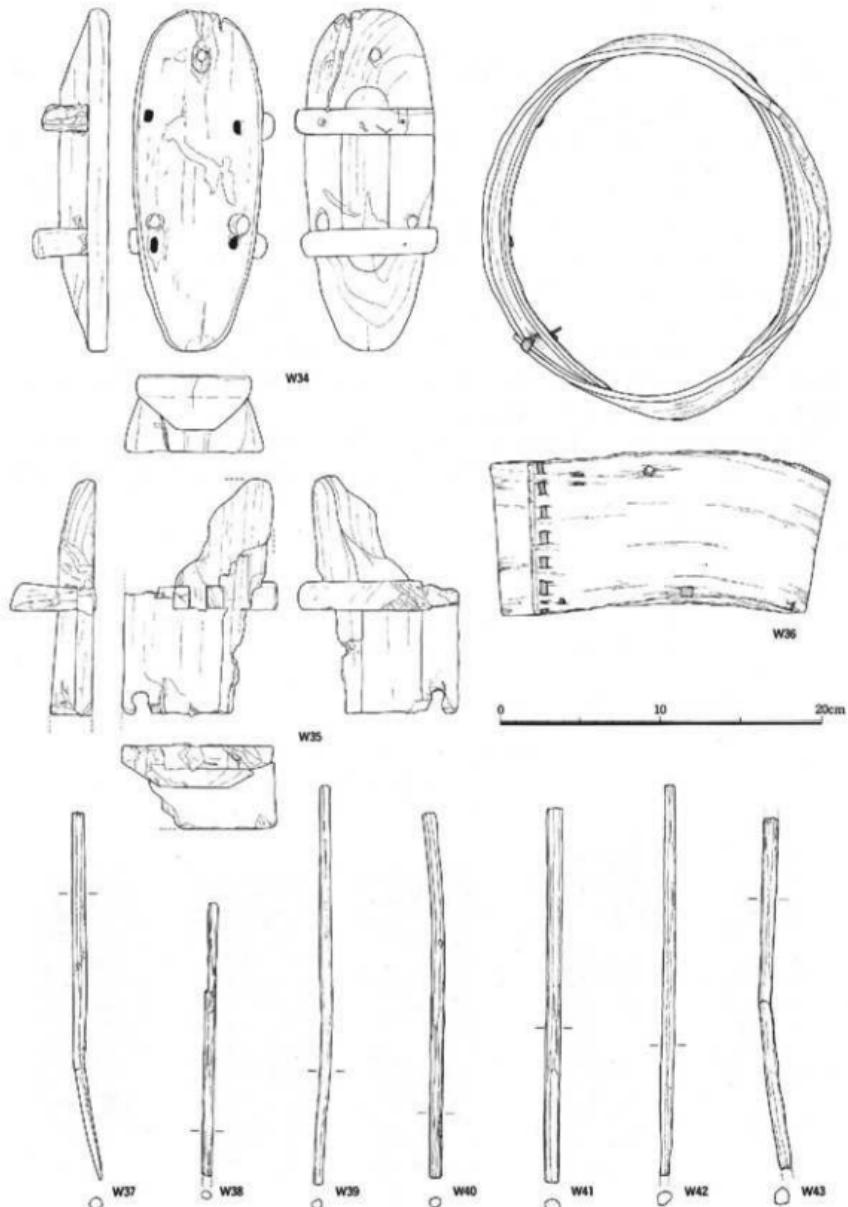


图52 SX-01出土木制品实测图 5 (S:1/3)

(2) 木製品

W1～W13は、ハケである。幅16～17cm程度の大型のもの（W1～W3など）と、幅4～5cm程度の小型のもの（W4～W6など）がある。この他に全体の形状は不明だが、その中間的な大きさのもの（W10・W11など）も見られる。また、極端に小さいものとして、W13があるが、これなどは筆と呼ぶ方が妥当かもしれない。構造的にはいずれも下半部に切り目を入れ、そこに毛を挟み込み、次に下端付近の小穴より毛を数cm単位で糸で束ね、最後に同じく下端付近の2本の浅い溝に紐を巻いて縛締して仕上げるもので、現在のハケと基本的に同じである。染料と思われる物質が付着しているものが多く見られ、中にはW1のように漆状の物質が付着しているものもある。なお、W1には釘のような金属製品で○内に「ハケ」と書かれている。また、W2とW10には持ち手に焼印があり、後者は「奥野」と読める。このことは、家伝の名字帯刀（享保9年=1728、付載参照）開始時期より半世紀以上さかのぼる17世紀第3四半期において、ここがすでに「奥野」姓を有したこと示している。W16、W17、W25、W27などは染色に関わる道具類と思われるが、具体的な用途は不明である。なお、W20には「九月九日」・「九月？」の墨書きがある。

W28～W35は、下駄である。朴歯は組によるものと、単に溝に差し込むものがあるが、後者の中には補強のために釘で朴歯を打ち付けたもの（W34）がある。また、W28などは子供用と思われる小型の製品、W34は女性用の製品であろう。

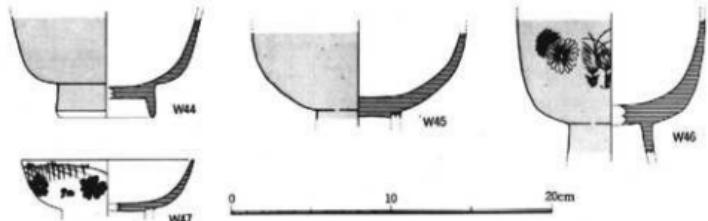


図53 SX-01出土木製品実測図6 (S:1/3)

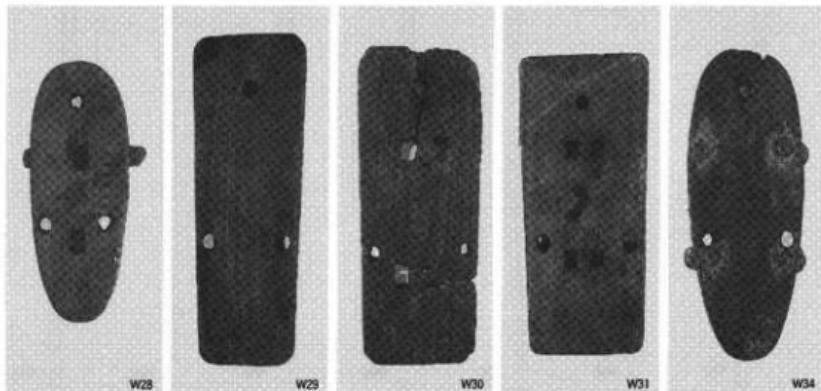


図54 SX-01出土木製品写真!

W37～W43は、箸である。W38以外は、全て20cm以上の長さを持つ。

W44～W47は漆器椀で、このうちW46は外面に彩漆による菊や草の文様を描く上製品である。

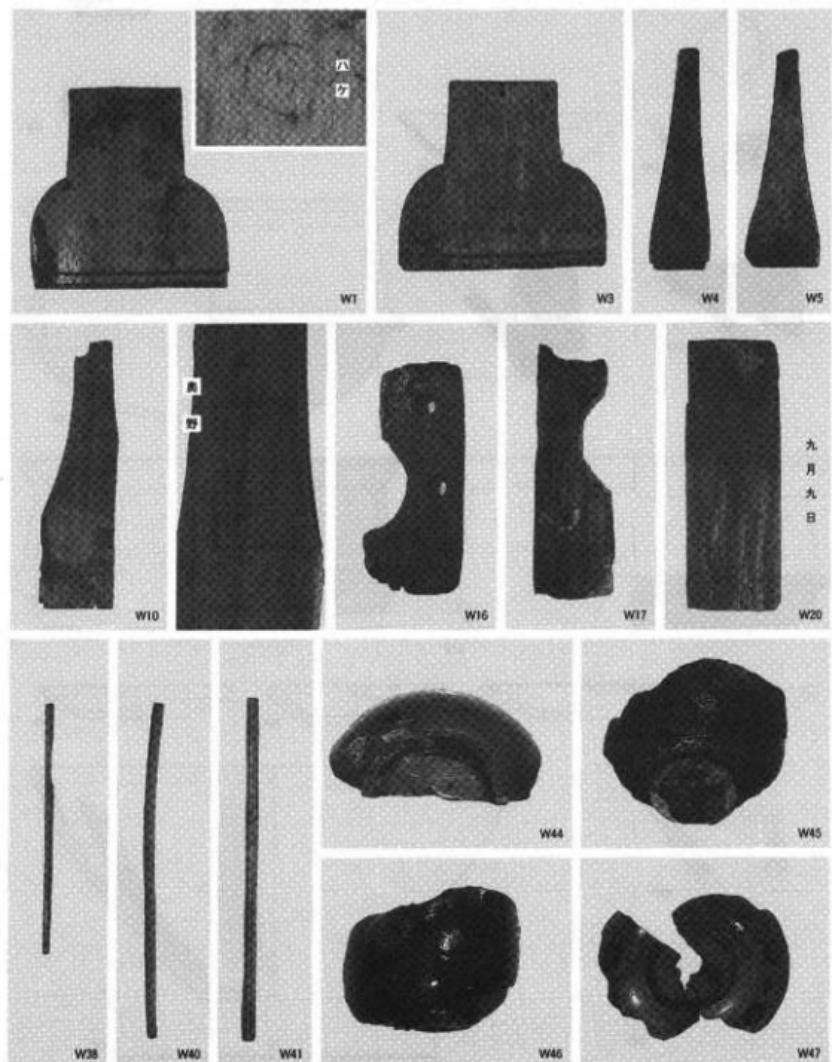


図55 SK-01出土木製品写真2

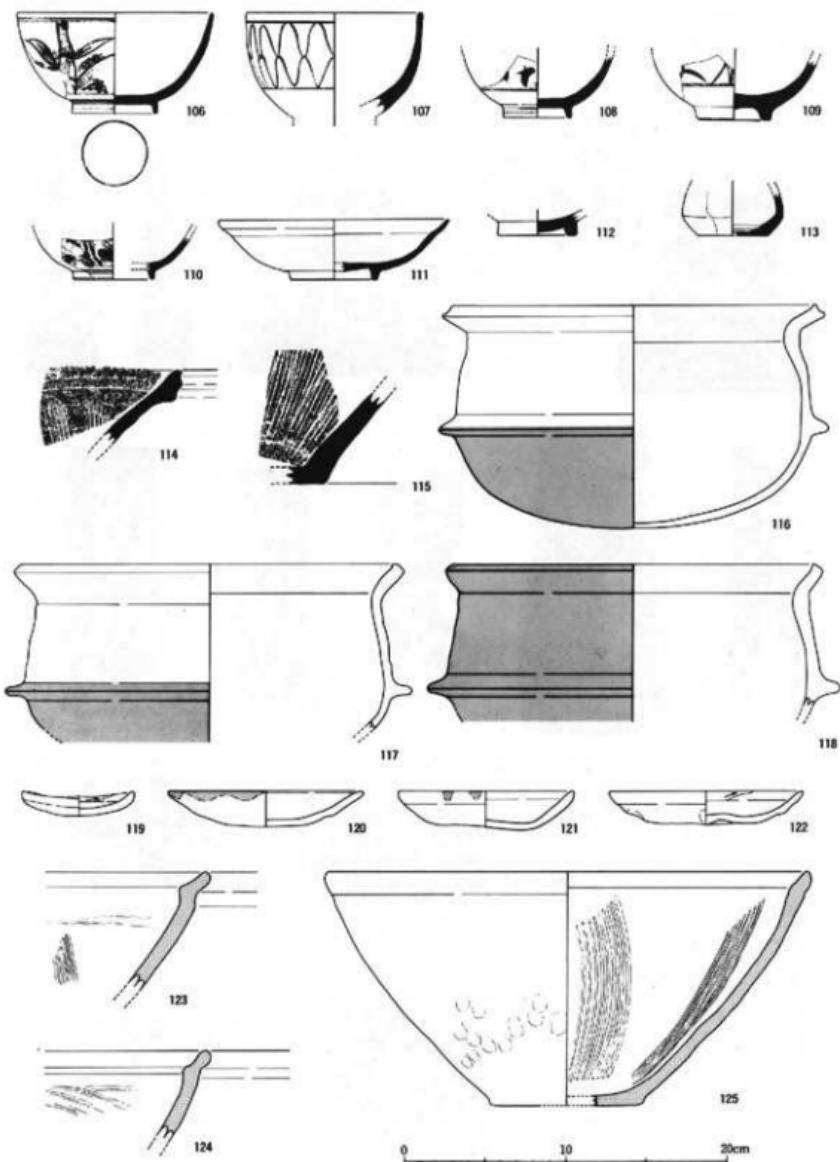


图56 SX-04出土遗物实测图 1 (S:1/3)

2 SX-04出土遺物 (図56~58)

本遺構からは、先述のSX-01とほぼ同時期の遺物が出土している。ただし、SX-01出土遺物中には含まれなかった瓦質摺鉢（123～125）が含まれるなど、若干古い様相もある。ここではこれらの遺物群を17世紀中葉を前後するものとして捉えたい。

106～111は、肥前磁器である。このうち、106・108・110は薄手の上製品。111は白磁皿である。112は、瀬戸・美濃焼の天目茶碗、113は同灰釉陶器茶入である。なお、焼締の摺鉢には信楽焼（114）と丹波焼（115）がある。

116～118は、大和I型土釜である。川口編年のIII-3型式（川口1990）に属する。119～122は、土師皿である。119を除く3枚は、直径11cm前後の中型品である。なお、120と121は灯明皿として使用された痕跡を有する。123～125は、瓦質摺鉢である。近江俊秀編年の7期（近江1994）、佐藤亜聖編年のG期（佐藤1996）に属する。なお、125の内面には朱色の付着物が見られることから、彩色用の顔料を磨り潰すことに用いられた可能性が高い。126～128は、瓦質火鉢である。口縁直下にヘラ描とクシ描の波状文を有する。129は、瓦質のミニチュア土釜、130は特異な形状を持つ瓦質摺鉢で、近隣の調査地において最近出土が確認されたものと近似した形態を有する（佐藤1998、山川1998）。

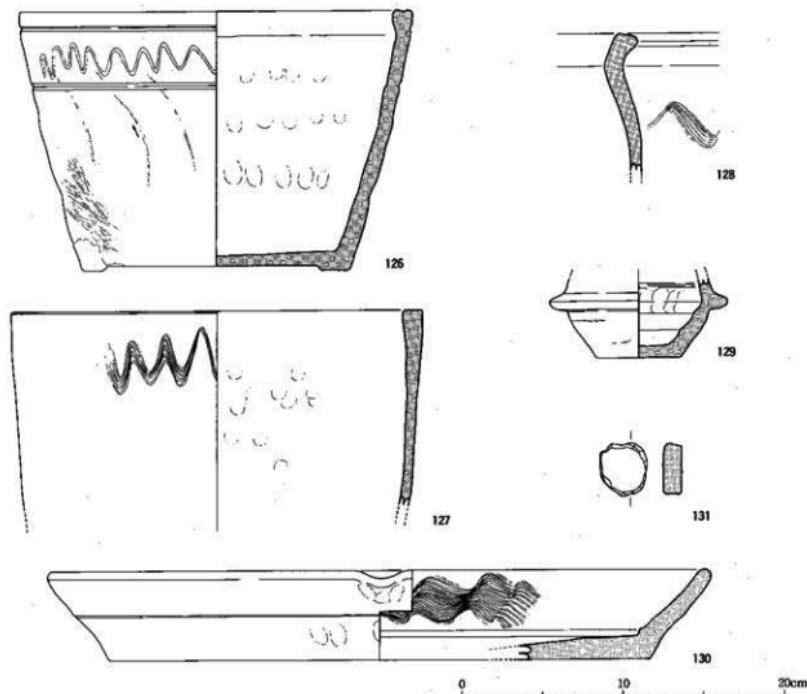


図57 SX-04出土遺物実測図2 (S:1/3)

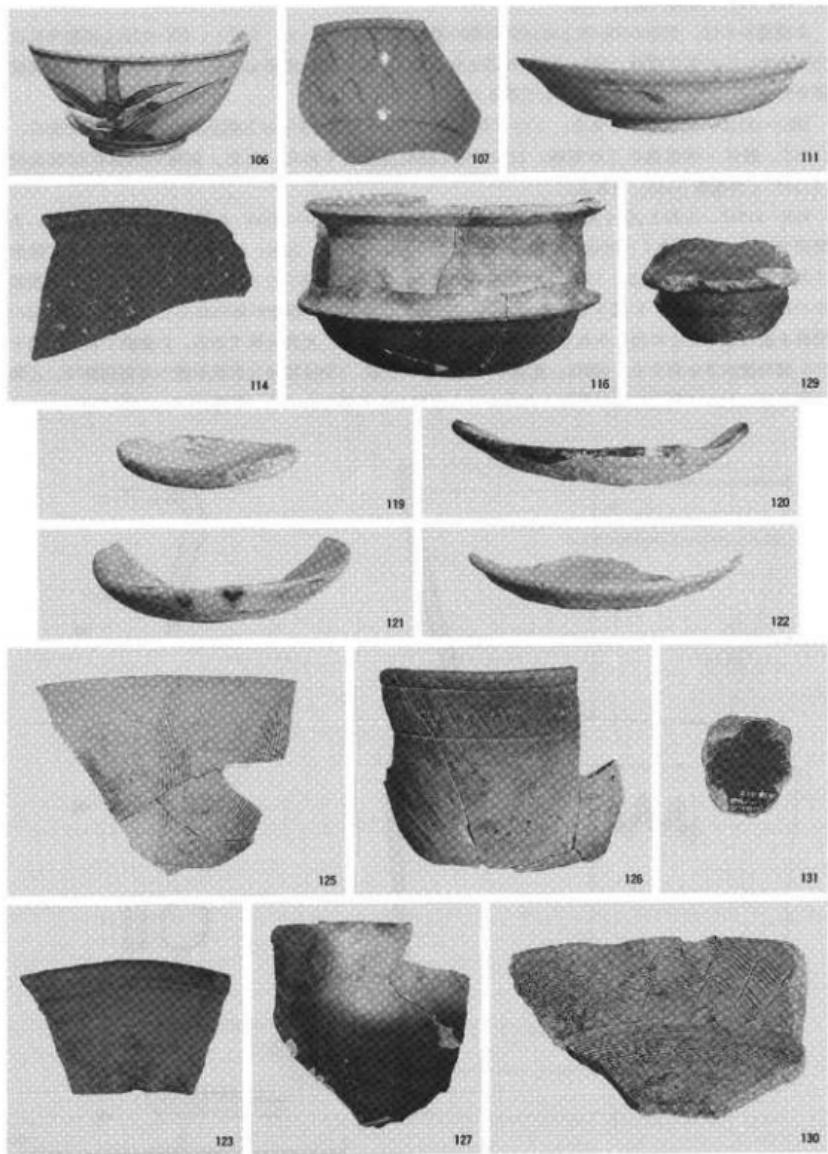


图58 SX-04出土遗物写真

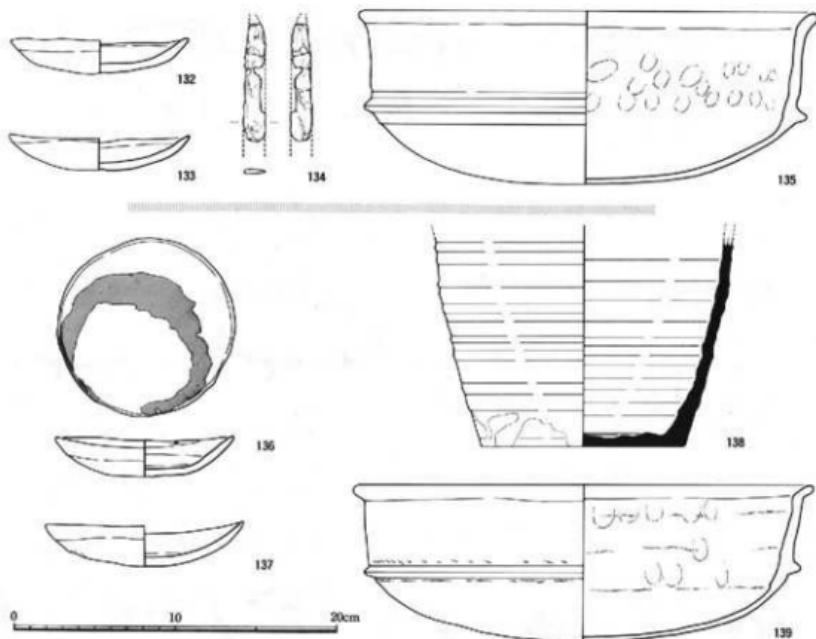


图59 SX-03出土遗物实测图 (S:1/3)

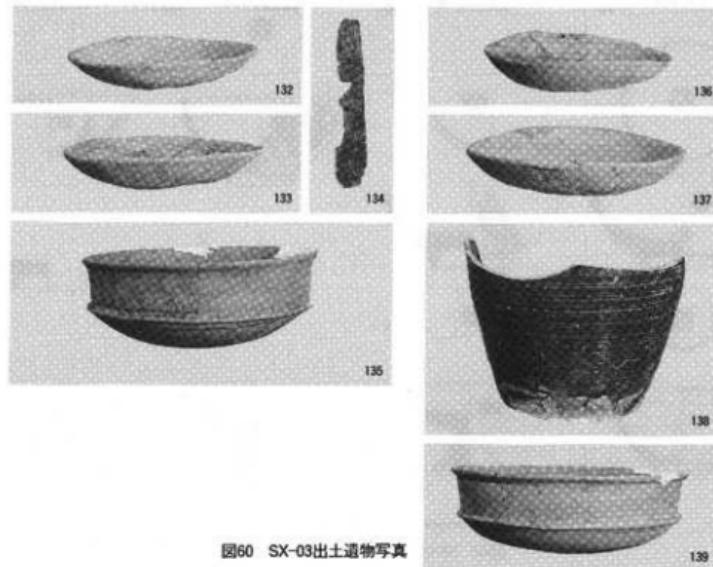


图60 SX-03出土遗物写真

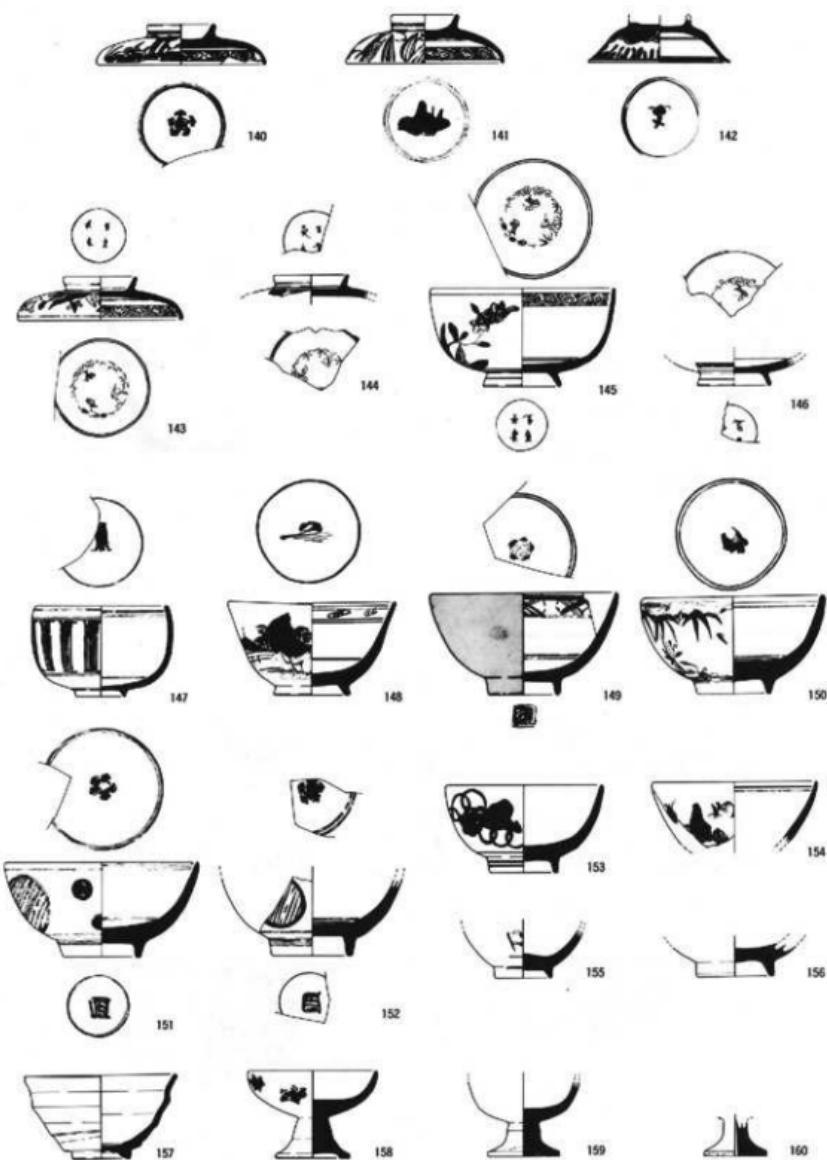


図61 SK-02出土遺物実測図1 (S:1/3)

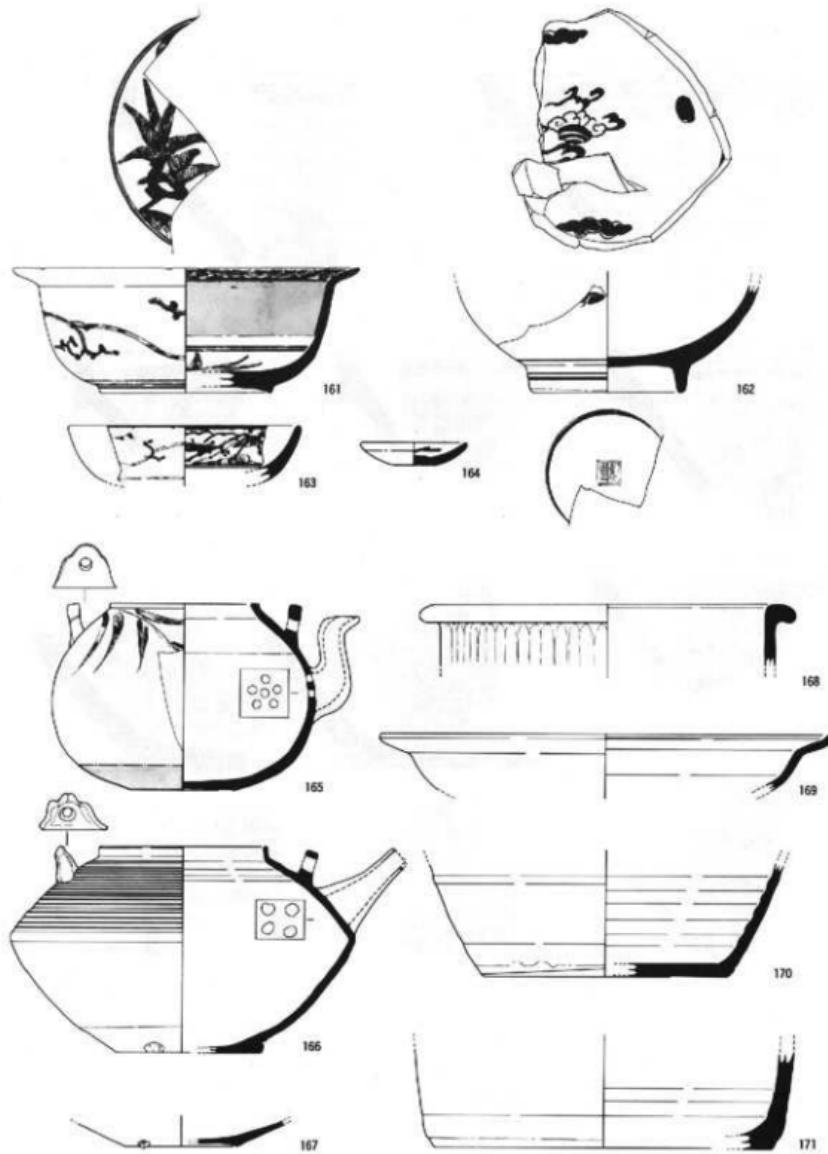


図62 SK-02出土遺物実測図 2 (S:1/3)

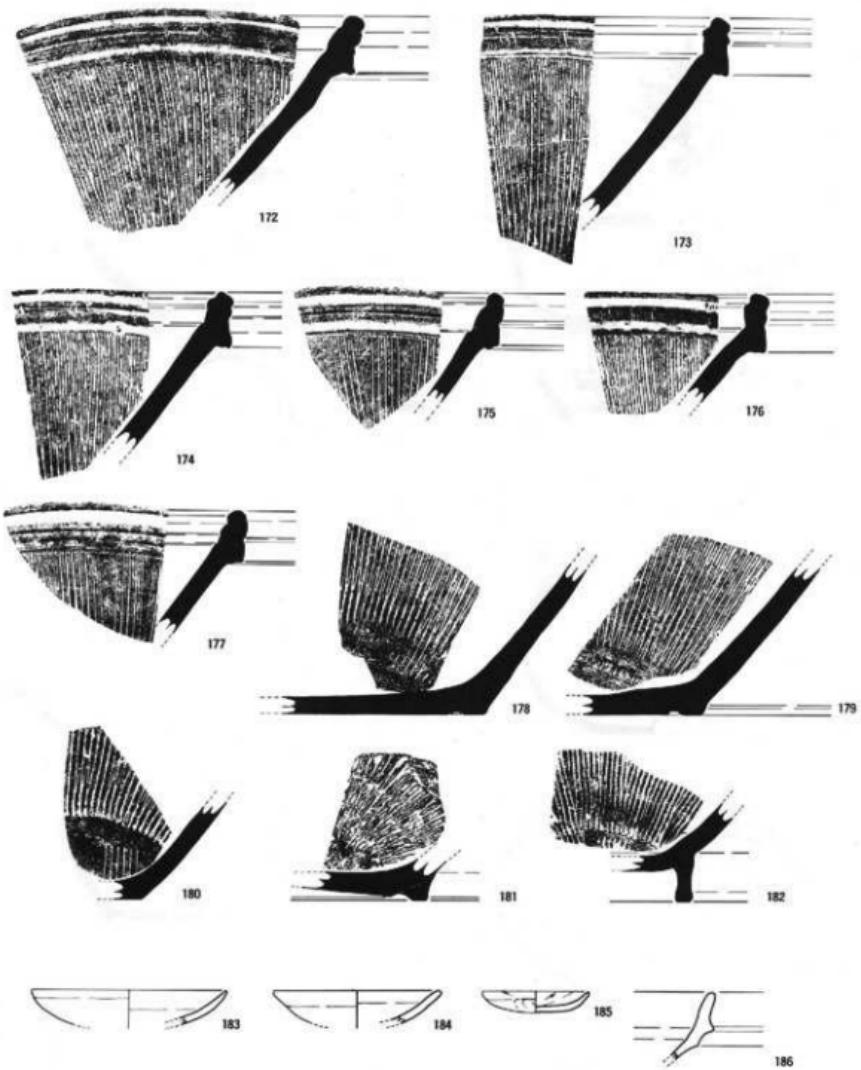


図63 SK-02出土遺物実測図3 (S:1/3)

3 SX-03出土遺物（図59・60）

本遺構は培塿2個体を縦に重ねた特異な遺構で、それぞれの培塿内部から土師皿等の遺物が出土した。培塿（135・139）は、難波洋三分類のC類に属するもので（難波1989）、同氏によって18世紀前葉～中葉の時期観が与えられているものである。今回の共伴遺物中に肥前磁器が含まれていないため明確な時期観を示すことは難しいが、土師皿の形態より考えて、おおむね18世紀初頭～前葉頃のものと考えられる。土師皿は上下の培塿共に2枚ずつ取められており、いずれも直径11cm前後の中型品である。このうち136には内面に黒褐色のシミが沈着する。このほか、上部の培塿内からは刀子（134）1本が出土しており、また下部の培塿内からは丹波焼と思われる陶器壺の下半部が出土した。

4 SK-02出土遺物（図61～65）

本遺構は、前述の通り藍薙を据え置いた穴と思われるもので、多量の瓦片と共に熱伝導の効率を上げるため（図20参照）に「ガラ」として投入されたものである。時期は、瀬戸の染付磁器や萩焼碗が含まれること、また、堺焼摺鉢中に19世紀中葉まで下る資料が含まれないことから、19世紀前葉頃（おそらく第1四半期）と考えられる。

140～144は、染付磁器蓋、145～156は、染付磁器碗である。このうち142は瀬戸の新製焼、他は肥前磁器である。145・146（碗）と143・144（蓋）はセットとなる上製品で、見込に松竹梅が描かれる。この他は148を除くといずれも肥前波佐見窯周辺の製品と見られる粗製品である。なお、149は外面に青磁釉が施された青磁染付である。157は萩焼胸器碗で、内面の鉄釉と藁灰釉の掛け分け、及び高台内部のシャープな釣彫りが特徴である。158・159は、肥前磁器仏飯器である。158の体部外面には桐文が描かれる。161・162は、肥前染付磁器鉢である。161は上製品で、体部内面には青磁釉が施されている（青磁染付）。165～167は、胸器土瓶である。165の外面には鉄絵で草が描かれている。168～171は、いずれも陶器製品で、168・170・171は瀬戸の製品である。

172～182は、摺鉢である。182が信楽焼で、他は全て堺焼である。いざれも白神典之編年の2型式2段階（白神1992）に属する資料で、3段階まで下る資料はない。183～185は、土師皿、186は培塿である。難波分類のFc類に属する資料である（難波1989）。

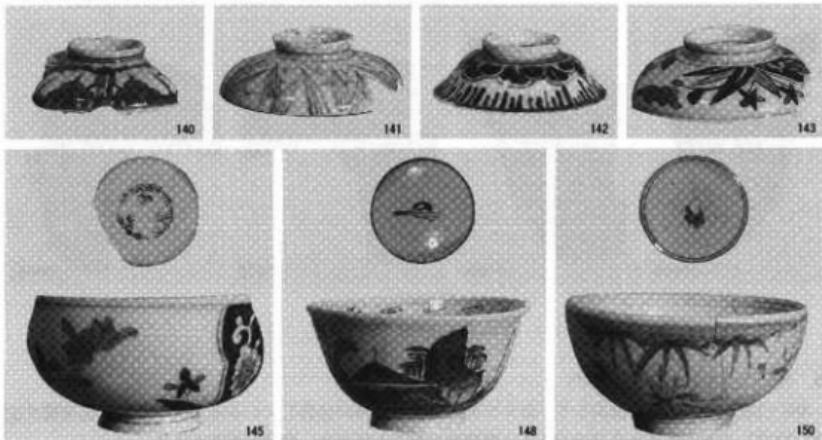


図64 SK-02出土遺物写真1

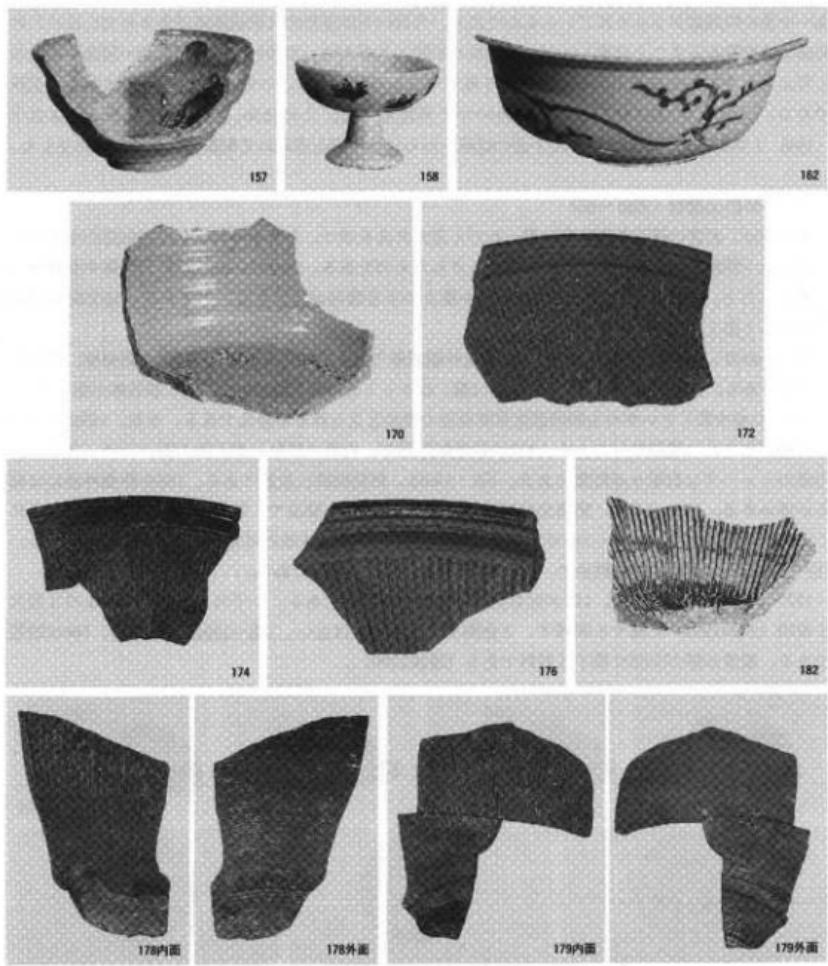
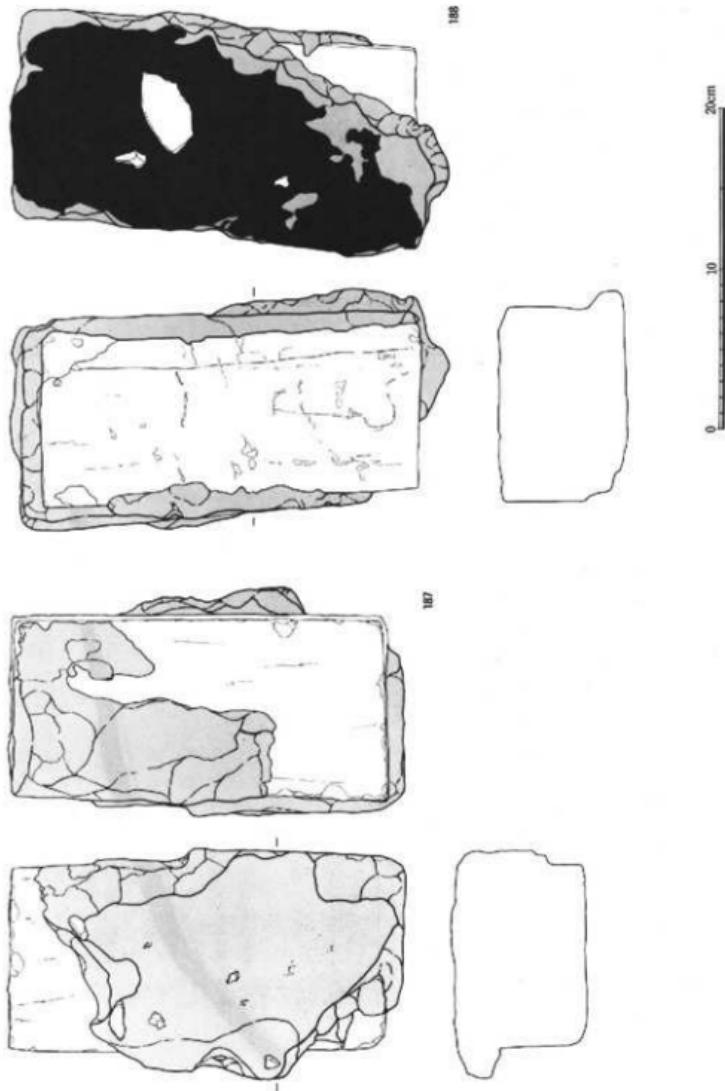


図65 SK-02出土遺物写真2

5 SX-02出土遺物（図66・67）

187・188は、本遺構を構成していたレンガである。漆喰が付着している部分（トーン）が遺構平面図（図22）の裏面にあたる部分である。部分的に黒変しており、受熱の痕跡がある。

図66 SX-02レンガ実測図 (S-1/3)



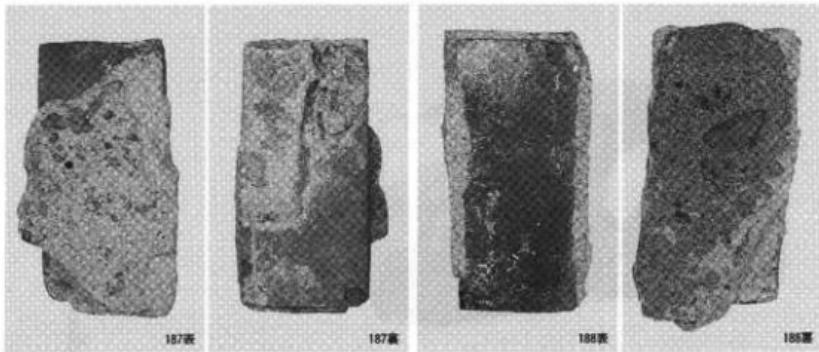


図67 SX-02レンガ写真

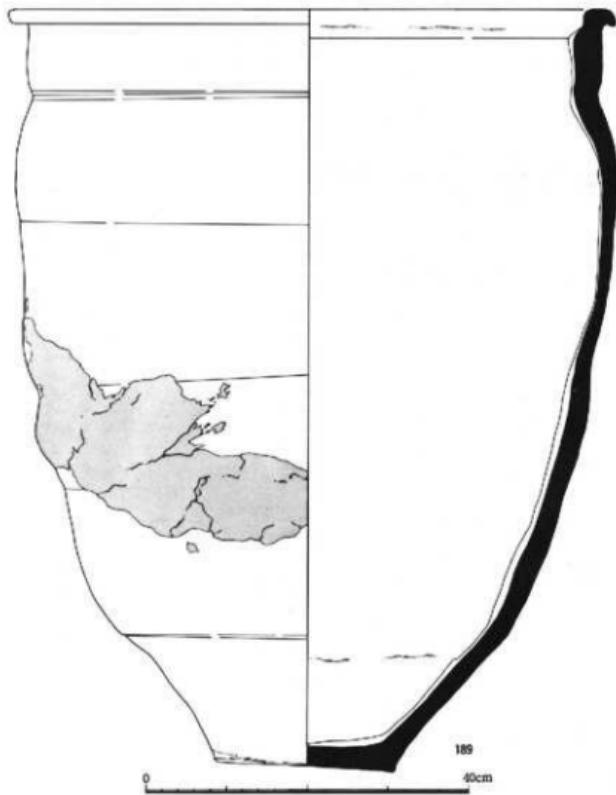


図68 豊賀-01実測図 (S:1/6)

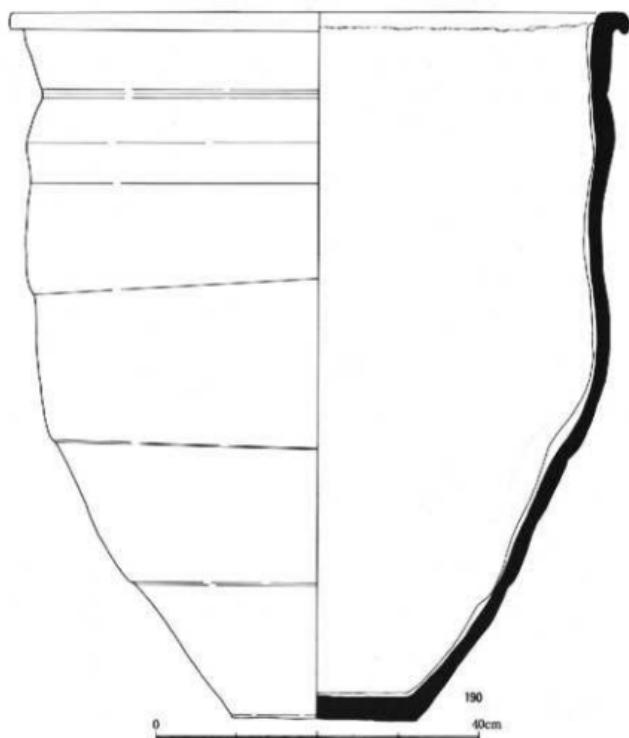


図69 藍壺-02実測図 (S:1/6)

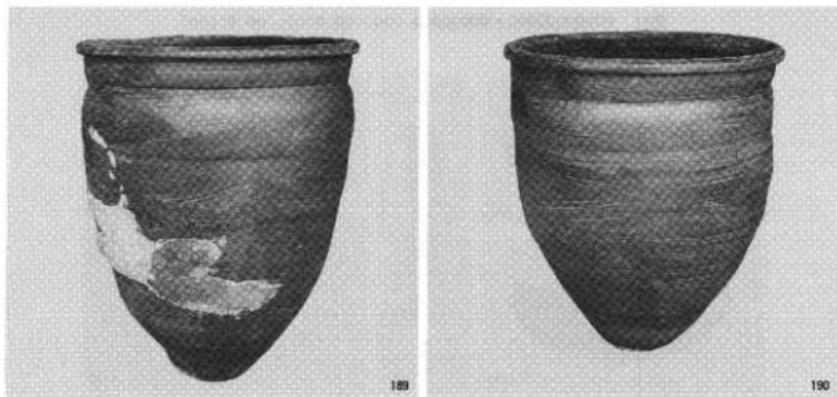


図70 藍壺-01・02写真

6 藍甕-01・02 (図68～70)

189が遺構図に示した藍甕-01、190が藍甕-02のそれぞれ実測図である。両者共に信楽焼甕である。内容量は250l前後、重さは01が63.5kg、02が70.2kgをそれぞれ測る。なお、内容量に関しては、本来1石半(約270l)を意図した製品であったと思われる。内面には厚くスクモの成分が付着している。また、189には外面に漆喰による補修痕跡があることから、これらの藍甕は数回据え代えられていたものと考えられる。甕の製作時期は不明だが、近代以降のものと考えられる。

7 その他の遺構(包含層)出土遺物(図71・72)

191・192は、陶器灯明皿である。191を下、192を上にして、2枚重ねた状態で使用されたものと見られる。191には内面に粘土粒による突起を3カ所有し、2枚の重ねた際に間隙を持たせるように工夫されており、上下2段それぞれに灯芯を入れることができるようになっている。使用痕跡から考え

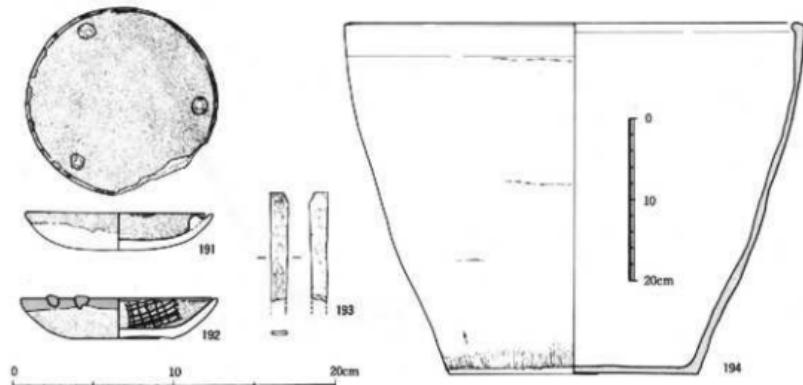


図71 その他の遺構出土遺物実測図 (191～193 S:1/3 194 S:1/6)

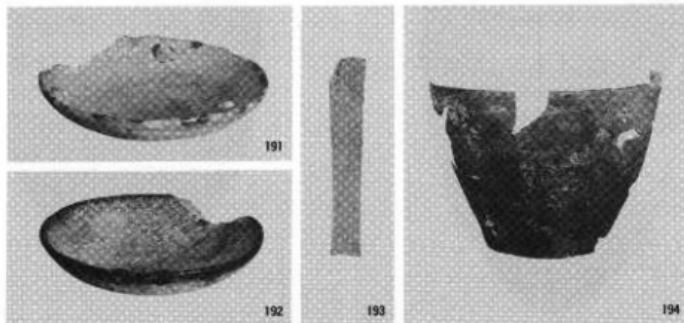


図72 その他の遺構出土遺物写真

て、実際には上段のみが使用されたケースが多いようだが、下段にも若干の使用痕跡があることから、2段（単純に考えて明るさは倍になる）の灯火がなされた場合もあったものと考えられる。職人特有の細かい作業用の道具といえるかもしれない。

193は、骨製の道具である。表裏面共に丁寧な研磨がなされている。用途は不明。

194は瓦質甕である。直線的な口縁部を持ち、通常は外反する口縁端部を内反させるなど、ややイレギュラーな形態を示す。内面には褐色灰色の付着物が見られるが、おそらく先述の藍甕-01・02と同じようにスクモに含まれる成分が固着したものと考えられる。

8 銭貨（図73・74）

銭貨は、全体で4枚出土した。いずれも寛永通寶（銅一文銭）で、鉄銭は出土していない。なお、C1とC4が古寛永（1636～1659）、C2とC3が新寛永（1697～1747、1767～1781）である。

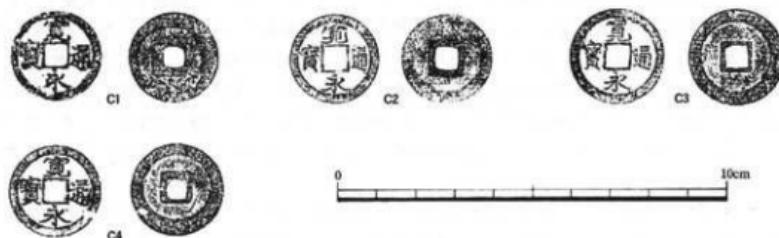


図73 銭貨拓影 (S:1/8)



図74 銭貨写真

V ま と め

今回の発掘調査は、限られた範囲での調査に止まつたものの、本書のII章で述べたように、伝統的な職能（藍染）を最近まで営んでいた家屋敷地の発掘調査という希有な機会であった。以下に、今回の調査で得られた主な所見について略述する。

- ① 16世紀末頃には、すでにこの地には居住の痕跡が見られる。この時期の建物は、掘立柱構造であり、掘り方内に柱沈防止のための石を据えていた（図13参照）。また、明確な整地痕跡はこの段階ではなく、地山に直接柱穴等の遺構が掘り込まれている。なお、この時期にここで藍染が行われたという遺物・遺構面での証拠は、今回の調査では得られなかった。
- ② SX-01と名付けた遺構より、17世紀第3四半期に属する遺物が多量に出土した。この中にはハケをはじめとする藍染に関わる遺物が多く含まれたことから、ここではこの時期すでに藍染を家業としていたことが判明した。また、ハケの中に「奥野」の焼印を有するものが存在したことから、すでに「奥野」姓も公称していたものと思われる（この点を家伝では18世紀としている。付載参照）。なお、ここから出土した多種のハケは、糊置きを主体とする同一工程内においても、作業内容の差異によってすでに道具が多様化していたことを示す有効な資料である。城下町集住からまだ半世紀に過ぎないこの時期におけるこうした道具の多様性は、中世大和の藍染に関わる高い専業性を裏付けるデータとして注目されよう。
- ③ 近代の藍染の調査から、スクモの発酵に関わる熱の有効利用方法（図20参照）を視覚的に明瞭に示すことができたが、今回の調査で、この技術は少なくとも19世紀第1四半期までは遡上することが明らかとなった（SK-02など）。ただし、17世紀においてはこの技術は存在しなかったようである（SX-04）。なお、藍染については、17世紀には在地産の瓦質甕が用いられ、18世紀以降においては信楽焼甕が用いられたものと思われる。
- ④ 18世紀初頭頃と見られる、焙烙を2枚重ねた特異な遺構を検出した（SX-03）。胞衣容器の可能性が高いと判断されるが、管見に類例を見ない。

今回の調査では、以上のような貴重なデータを得ることができた。今後、中世のものも含め、全国各地における類例遺跡の考古学的調査・研究の進展により、藍染に関わる技術変化等が明らかになってゆくものと期待される。また各個別研究の深化により、将来的には紺屋のみならず「職人」全体の階層分化や専業化の過程解明も可能になることであろう。

【参考文献】

- 浅野 清 1966 「郡山内町の町屋建築」『大和郡山市史』柳沢文庫専門委員会
近江俊秀 1994 「大和瓦質摺鉢考」『研究紀要』2 由良大和古代文化研究協会
川口宏海 1990 「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
佐藤亜聖 1996 「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI 日本中世土器研究会
1998 「郡山城下町出土の瓦質土器」『中世土器研究』90 日本中世土器研究会
白神典之 1992 「堺摺鉢考」『東洋陶磁』19 東洋陶磁学会
難波洋三 1989 「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
山川 均 1996 「筒井城に関する復元的研究」『関西近世考古学研究IV』関西近世考古学研究会
1998 「郡山城下町 紺屋町・新紺屋町地区発掘調査報告書」大和郡市教育委員会

付載 奥野義夫氏聞き取り調査

1 調査の契機ー「紺屋」としての奥野家についてー

以下に収録したインタビュー等は、奈良県教育委員会から委嘱された「奈良県諸職関係民俗文化財調査」の一環として筆者らが実施した調査の一部である。調査の実施年月は1993年5月（日時の記録を欠く）で、回答者は奥野義夫氏（大正10年〔1921〕生まれ。当時72歳）。

紺屋としての奥野家は、屋号を「柳宗（柳屋）」といい、義夫氏で9代目という。ちなみに、奥野家蔵の家系図から当時筆者が書き写した家系は以下の如くである。

創業享保13年（1728）6月（※1）－3代 宗左衛門－4代 宗右衛門－5代 宗兵衛
－6代 再興之主カジ（※2）－7代 不明－8代 宗一郎－9代 当主

※1 これに先立つこと4年前の享保9年（1724）に、柳沢吉里が甲府から郡山15万石の城主として入封している（表1参照）。したがって奥野家の紺屋としての創業は柳沢家入封以後ということになり、また奥野家家伝でも名字・帯刀は柳沢氏によって認可されたものと伝える。ただし、本書に報告するように、今回地下遺構の調査によって17世紀後葉にはすでに「奥野」姓が用いられており、かつその職業もすでに紺屋であったことが明らかとなった。

※2 家系図によればこの頃コレラが流行し、惣家の家系はいったん途絶えるようである。そこで傍系から養女（当時12歳）を迎えて、おそらく藍染職人を養子縁組させることにより家系および店の存続が計られたものと思われる。

2 インタビュー（聞き手—山川均・武田浩子）

聞き手 製品の製作工程や用具についてまず教えていただきたいのですが。

奥野 私の代では用具などはあまり残ってませんが…。

聞き手 先程、刷毛とかありましたよね。三角形のものは何ていいましたか。

奥野 ああ、糊筒（のりづつ）ですね（図76）。

聞き手 今ある物だけで結構ですので、見せていただけますか。

奥野 こういうもので描いていくわけです。文字や絵によって太いのや細いのがいろいろあって、この中に入れて、モチ（糊）をのせていくわけです。

聞き手 これはいったい何ですか。紙みたいですけれど（図77）。



図75 刷毛

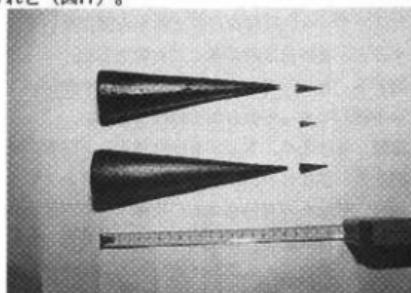


図76 糊筒

奥野 これは淡紙（しぶがみ）です。昔の小紋とかの着るもの型紙ですね。これらは枚数がないとだめなので、こうしたものならたくさんあります。これらの下絵はみんな手で描くようになります。

こういう下絵を自分で描いて。これはのれんの下絵ですけど、今はこういう職人はいなくなりましたね…。これは近鉄前の「やぶ」（食堂）ののれんの型紙ですが、これをキレ（布）に写し、それでその絵の上にモチを置いていくわけです。全体を染めて、乾いた後に水で洗うとモチを置いた部分の染料は取れて白抜きになるわけです。まあ、こうしたのれんのほかに現在の需要といえば、嫁入りのときの祝い幕くらいですね。

私たち若い頃は、近鉄前の店や飲食店自身が、のれんを掛けないといけないような店構えでしたけど、この頃は全部変わりましたね。昔のままの構えの店は、近鉄前では一角しか残っていません。

うちで一番のお得意先は岡町（遊郭地帯）です。もっともみんな廃業してしまいましたけど。あのあたりののれんは、全部うちが手掛けたものです。現在うちに仕事を頼みに来られるのは、一部の老舗ぐらいですね。ここ近くでしたら筆の博文堂さんとか、お菓子の菊屋さん、少し離れた所では三輪素麺の山本さん（桜井市）などですね。最近の店は入り口の構えからして昔と違うから…。

聞き手 できあがってくる製品なんですが、まずのれんですね。他には何かございますか。

奥野 さっき申し上げたように祝い幕などがあります。

聞き手 祝い幕の具体的な名前を教えてください。

奥野 まずは門幕（かどまく）ですね。それから、神社やお寺の門幕（もんまく）。それに旗（はた）。今でしたらこれぐらいですね。

聞き手 昔は他に何かありましたか。

奥野 昔はみんな糸染めでしたからね。でも近ごろの農家で自家製の織物を作っているところはないでしょうね。昔は田に入るといえば藍で染めた木綿のパッチでした。蛭は藍を嫌がるから、藍染のパッチをはいていると蛭がつかないわけです。今は長靴をはきますから関係ないですけど。昔の田は蛭が多くて大変でした。

聞き手 ところでこの藍染めの時期ですが、一年中通してやっておられるわけですか。

奥野 そうです。もっとも今はほとんど需要がありませんけど。

聞き手 現在は年間にどのくらい生産されているのですか。

奥野 昔からのお得意さんの仕事くらいですかね。さっき言ったもののはかは呉服屋さんとか。今はもう気楽な商売で、気に入らなければ断っています。

聞き手 奥野さんもかつて藍染めの技術を学ばれたと思うのですが、入門・修行というか、その辺の事情はどうだったのですか。

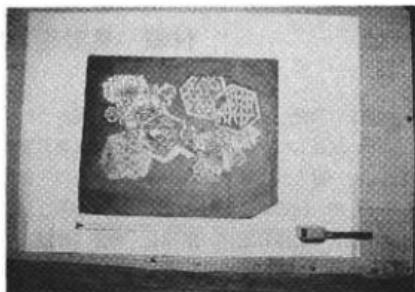


図77 淡紙



図78 門幕

奥野 私は三男で、実は本来世襲するはずの兄がいました。その兄は京都へ修行に行きましたけど、その後死んでしまったのです。その時、私は兵隊を行っていたんですが、帰って来たらそういうことで、これは何とかせんといかんということで。こういう事情ですので、おっしゃるような昔の技術などは、私の場合は我流です。親のやっていたことを見様見真似でやっているだけのことです。

うちの過去帳を見たらわかりますけど、養子（縁組）が多いです。現在の京都でもそうですけど、我々職人の家というのは、必ずしも息子が世襲しないといけないということはなかったんです。大きな店は、腕のいい職人を引き抜くわけですね。そんな職人はその人なりの我流の技術を持っていまして、染料の配合でもいちいち秤りにかけなくても、さじ加減だけできっちり色を合わせていったものです。それが技術というか、長年の経験ですね。

聞き手 例えば、のれん分けとかそういうことはないですか。

奥野 明治以前はありました。うちも分家したことはあります。ただその時分は家によって得意先の区域が別れていましたね。例えばうちはだいたいここから東、平和（現在の大和郡山市東部の農村地帯）一帯ですけど、今はクリーニング屋をされている奈良屋さんは矢田（現在の大和郡山市西部の丘陵地帯。当時は谷筋の水田を中心に農村が点在していた）方面というふうに。ですから、のれん分けではそうしたお得意さんも本家から分けてもらわねばいけないわけです。

聞き手 そうしないと確かにやっていけませんね。

奥野 そのような、それぞれの担当区域があったわけです。まあうちはお城の仕事があったので、平和の方の得意先は分家筋に分けたりもしましたが。

聞き手 江戸時代を通して、染物屋はここに集中していたのですか。

奥野 いや、集中というか、ここでしかできません。

聞き手 それは水の関係ですか。

奥野 いや水ではありません。門外ではできないんですよ。紺屋の営業の認可状というものがありますね。この紺屋町の場合は早味さん（通りを隔て対面する家）が持っています。あの家も昔は紺屋さんでしたからね。とにかく豊臣秀長以来、郡山城主は城下町を繁栄させるために、どこでも好きな場所で商売できないように制限を加えたわけです。これらには箱本十三町というのがあります、紺屋町筆頭で豆腐町とかがありましたけど、それは限られた場所でしか商売できなかったわけです。その代わり税金は免除されたりしたんですけど。

聞き手 地租免除ですね。

奥野 そういう方法で城下町を守っていたんですね。

聞き手 いろいろな伝統的職業に従事されている方にお聞きしている内にだんだんわかってきたのですが、城下町の形成当初はともかく、江戸時代後期～幕末頃になると同業者は城下町各所にばらけてくるような感じがします。それに比べ、ここ紺屋町に関しては結束が固かったようですね。

奥野 だいたい8軒ほどあったらしいですね。もっとも今は皆、後継者もないし、やめてしまつてしまふけどね。

聞き手 こういった同業者の組織とか組合に関してはどのようなものがあるのですか。

奥野 現在同業者が残っていないですから、組合はありません。

聞き手 それでは、昔はありましたか。

奥野 はい、「染友会（せんゆうかい）」というのがありました。それには関連業者も入っていたのですが、20人近く会員がいたと思います。私が子供の頃には、親睦旅行の掛け金を集めに行っていました。その内、実際に染物をやっている家は3～4軒だけで、後は型置き屋や糊置き屋といった関連

業者です。

聞き手 旅行に行かれたそうですが、それは親睦旅行で、特にお伊勢さんとかそういう特定の神仏を参拝しに行ったわけではないのですね。

奥野 そうです。単なる親睦旅行です。

聞き手 では「染友会」は信仰と同じくするような組織ではないのですね。何々講とか。

奥野 はい、そういう集まりではありません。

聞き手 話は全然違いますが、例えば糊置きといった作業で、年齢による分業はあるのですか。

奥野 それは特になかったですね。ある程度の上手下手はありましたけど。

聞き手 先程型紙を見ていて思ったんですけれども、下絵のデザインをされる方は別におられるですか。

奥野 はい。紋を描く人とか。

聞き手 そういうデザインもそれぞれのお店毎にやっておられたのですか。

奥野 いや、染物屋とは別に型置き屋というのがあって、それぞれの染物屋には決まった型置き屋があったわけです。うちちは紺屋ですから、染めるだけです。

聞き手 つまり下絵師と呼ばれるものですね。ところで、職人さんの着ておられた着物はどういったものでしたか。

奥野 作業服は特になくて、下帯だけというのが多かったです。冬でも。

聞き手 冬でもですか。

奥野 ええ、ここで火を使っていましたからね。藍を温めなくてはいけませんから。それに染物は力仕事で、糸を絞るのに相当力が要りますから。

聞き手 食事については普通のものを食べておられたのですか。例えばお祭りの日だけは特別なものを食べるとか。

奥野 特別なものはなかったですね。私が子供の頃は、みな職人はここ（入り口横の作業場）で食べてました。それで家の者は奥で食べるわけです。それからその頃の職人は通いの人でも家族一緒の場合が多かったです。子供や奥さんを連れて仕事に来るんですね。

聞き手 通いの人でも家族連れですか。

奥野 ええ、そんな時分はおおざっぱでしたから。みんなで食べて行け、といった感じで。そういうえば、その頃は集金にしても年に2回でしたね。盆と年末と。それは問屋に払う勘定も同じことでした。一般の農家の人にもらう勘定も、米が獲れてからとか。

聞き手 つまり、報酬を払うのも年2回ということですね。

奥野 そうです。その頃は、年季奉公といって今のような月給はありません。1年間の契約は200円とか、そういう風になっていました。

聞き手 そういう職人の方は随時ここで仕事をされていたわけですか。例えば農業の片手間にやるとか、そういうものではなかったのですか。

奥野 技術の人は通いでした。農家の次男や三男が多かったと思います。このほか、ここで寝泊まりしていた人もいます。小回りの職人のことですね。今申し上げたように技術的な職人は家から通っていましたね。うちで3人ほどいました。それから小回りの職人は年季奉公です。小学校に上がるか上がらないかの子供で、1年に100円の子もあり、150円の子もいました。

聞き手 職人さんが住まわれていた建物について、何か呼び方はあるのですか。

奥野 特別な呼び方はなかったです。私たちは単に「長屋」と呼んでいました。この家にも3つくらい

いありましたね（図79）。

ところで、この辺りも戦前と戦後ではすごく変わりました。私が兵隊に行く前は、いかにも紺屋町らしい、風情のある町でしたね。菊亭という料亭や、大和という大きな銭湯もありましたしね。夕方になつたら芸者さんが人力車で行き来するし、日暮れになつたら三味線が聞こえてくるといった、のどかな街でしたね。今は車が頻繁に通って大変ですけど、昔は車が通つたら「ああ、どこに止まるんやろ」というので皆で見るんです。というのは、車なんて昔はお医者さんくらいしか乗つていませんでしたから。変な話ですけど、車は重病人の家にしか止まらなかつたのです。それが戦後、何もかも変わりました。昔はここらは子供でいっぱいだったんですよ。ところが今は、昼でも夕方でも子供の姿が見えない。みんなテレビを見たり、塾に行つたりしてゐるんですね。昔の子供は「いい加減ご飯食べに帰らんか」と家の人が怒りに来るまで外で遊んでいたもんですがね。

聞き手 そういう子供独自の組織とかは確かにありましたね、子供会とか。

奥野 ありました。その通り（蘭町通）を中心に東側のグループと、我々のグループと、西側のグループと、この周辺で3グループあったわけです。

聞き手 その子らがある程度大きくなつたら、どうなるのでしょうか。

奥野 中学校に行く家もありましたけど、ほとんどは職人の修行に出たりして、別れて行きます。その時に大学へ行く家はこの町で1～2軒くらいでしたね。中学で4～5軒というところです。

聞き手 この辺りで、独特の年中行事はありますか。

奥野 この辺りですと、地蔵祭りですね。

聞き手 それはこの辺の染物屋さんだけのお祭りではなかつたのですね。

奥野 はい。主催はここの自治会です。今は95戸くらいあります。

聞き手 先程いいました、染友会での独自のお祭りはありませんか。

奥野 それはなかつたですね。

聞き手 染物屋に独特の神様を祭つてあるとか、そういうことはございませんか。

奥野 ないように思いますが…。

聞き手 まあ、そういうものは滅多にないのですが。ただ造り酒屋さんにちょっとあるようです。

奥野 ああ、そうですか。酒屋さんには、三輪講などの講がかなりありますね。そういうえばこの家でも愛染明王を祭つていますね。私はよく知りませんが、明治の初期頃には大阪に「染屋の愛染さん」の講はあったようです。

聞き手 それでは、全くないわけでもないのですね。

奥野 まあ、それは紺屋さんの講だったようですね。

聞き手 大阪の愛染さんですか。

奥野 そうらしいです。

聞き手 この業界独自の符丁や数の数え方などはありますか。

奥野 昔はあったかもしれませんけど、私は知りません。



図79 長屋跡